女子國文 巻一

42148
教科書文庫
4.
810
42-1918
20000
65466
4b
810
大7

天皇陛下

4b
810
K7

資料室

大二 正月七四年日 文部省檢定濟 高等女學校 國語科教科用書

文學博士芳賀矢一編

女子國文

東京 冨山房發兌

広島大学 教 65466 図書

女子國文卷一

目次

一 天照大神……一
二 月雪花……四
三 櫻のいろ〳〵……一〇
四 渡舟（韻文）……一五
五 家庭（自修文）……一八
六 父の許へ（書簡文）……二二
七 東京……二五
八 神田の大火事（自修文）……三三

九　いろはガルタ……五八
一〇　眞の人……四一
一一　小木曾つぎ……四七
一二　時計……五一
一三　舊師に贈る（書簡文）……五三
一四　智慧伊豆守……五五
一五　花の色……六一
一六　花菖蒲の美觀（自修文）……七〇
一七　海王國の婦人……七三
一八　須磨日記……七八
一九　大和の孝子と芭蕉翁……八三

二〇　夕立……九一
二一　祖先……九三
二二　汽車の旅（一）……九六
二三　はがき便（書簡文、自修文）……一〇一
二四　我が國の交通……一〇四
二五　細川幽齋と太田道灌……一〇八
二六　天長節……一一三
二七　しか女（自修文）……一一六
二八　鳥の美……一一八
二九　乃木大將（韻文）……一二五
三〇　柔よく剛に克つ……一二九

目次

三一　看病……一三
三二　病める友の許へ　同返事（書簡文）……一三五
三三　春夏秋冬（韻文）……一三八
三四　一年の折々（自修文）……一四三
三五　愛國婦人會……一四六
三六　明治天皇の御遺物を拜す　其の一……一五一
三七　明治天皇の御遺物を拜す　其の二……一五七

女子國文卷一

一　天照大神

我が皇室の御祖先は天照大神にまします。高貴の御身を以て農業にいそしみ給ひしこと、古史に「天の狹田長田を以て御田とし給ふ。」と記せるを以て知るべし。又「神衣を織りつゝ齋服殿にまします。」とも見えたれば、機織の業をさへ親らし給ひしなり。

御弟の素盞嗚尊、大神の農事を妨げたまひて、春は

重播しまた畔を放ち、秋は天斑駒を放ちて田の中に伏さするなど、狂暴のふるまひ度重りしかど、大神は、「醉ひしれてなす業ならん。」と宣ひて、少しも咎めたまはざりき。

狂暴
醉ひしれて

其の後、素盞嗚尊おのが治むべき國に行かず、高天原に上り來と聞し召して、「彼我が國を奪はんとする心あるか。」と宣ひて、御髪を結び上げて髻とし、御裳をひきまつひて袴にし、背には五百箭の靫と千箭の靫とを負ひ、弓はずを振立て、劍の柄を取りしばりて、をたけびして其の故を詰り問ひ給ひき。日頃柔和溫順

髻
裳
靫
をたけび

にましまず大神の、「此の度こそは國家の大事。」と思し召したればなるべし。

理想

勤勉にして平和なる生活を營むは、日本國民の理想とする所なり。溫良にして人の非を咎めず、慈悲の德海よりも廣きは、日本婦人の美點と稱せらる。されど非常なる變厄に際しては、身を棄てゝ難に殉ずるも亦日本女子の意氣にあらずや。かけまくも畏けれども、皇祖天照大神は、げに日本女子の典型にてましますなり。

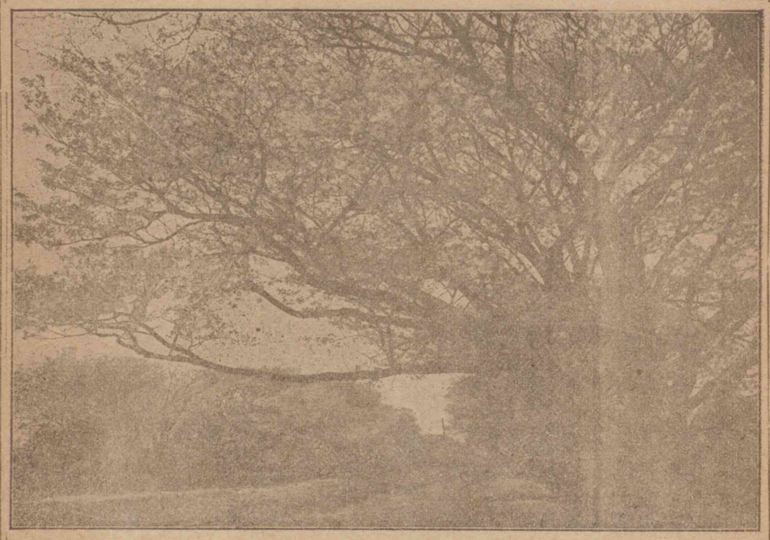
かけまくも畏し
典型

大宮人
雅興

二　月雪花

春はハナミ、夏はスヾミ、秋はツキミ、冬はユキミ、夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係は無いが、夏の月夜のスヾミは又格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂の時期である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。「お月樣いくつ。」の俚諺、「雪よふれふれ。」の童歌、月雪花の風流は子供のときから敎へられて、我等の頭にしみこんで居るのである。

歷史的懷舊
徑庭



花（小金井のにほひ櫻）

月雪花を見て感ずるのは、歷史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は唐人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感ずる所と我が國民の感ずる所には大きな徑庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興

詩的教育

味をもつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育せられた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

塵世

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めて居る間は、如何なる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術とおなじく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。

皎々
皚々

利慾に營々たり

高尚

蹉跌

我等日本人は月雪花を大に觀賞して、之を人事と結合した。高尚な人格は之を月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、之を人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべて此の譬喩法を用ひて居る。

有情化
有德化

光風霽月

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更に之を有德化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語せられて、君子人の赤心に比

邪佞　なゞらふ
氷潔嚴肅　連想　節義

べられる。月を蔽ふ雲は其の光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。又雪は氷潔一點の塵の無いことから、冷たい嚴肅な所を見て、潔白な精神や節操の動かないことを連想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を拋つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、此等の德を備へて居るやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つた其のまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を觀賞し得る吾等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつて居る話に、或時月明に對して、

花ならば探りても見ん今日の月

といつた。又京都に上つた時、御所の南殿の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戲れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも
なかゝよしや雪のふじのね

といつた。

（一）姓は塙。武藏の人。群書類從の編者。文政四年（一八二一）歿。年七十六。

（二）紫宸殿のこと。

民族　傳說　品性　國民性　肉眼　心眼

世界に月雪花の眺を恣にする事の出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、之に附加せられた傳說の無い國民も亦人生の興味は尠い。我等は月雪花に對して、古來の文學を味ひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出來る。月雪花を通じて、我が國民の歷史は髣髴として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

三　櫻のいろ〳〵

(一)歌人・伊勢祭主大中臣輔親の女。件

(二)藤原道長の女。名は彰子。一條天皇の中宮。

當意即妙

奈良櫻といふのは小輪の八重櫻で、莖は長く細く、やさしい花である。一條院の御時、之を宮中へもつて來た。(一)伊勢大輔が始めて參つたときて、(二)上東門院は件の花を伊勢の前に出され、檀紙、硯を其の前に置かせられた。人々何とお答するかと目を見合せて居ると、さら〳〵と書いた歌、

いにしへの奈良の都の八重櫻
今日九重に匂ひぬるかな

當意即妙に萬人感歎し、宮中皷動したといふ。

又同じ御時とか、奈良の南圓堂の前にあつた大き

な八重櫻を、天下の名花なれば、宮中に移し植ゑようと興福寺に仰せ出されたが、僧徒等はなか〳〵承知せず、たとひ罪を得るとも、此の花外へはやらじと爭ふと聞し召され、衆徒の花を愛する心のやさしきを感ぜられ、伊賀國舘野を寄せられ、花の頃は宿直して此の花を護れと仰せられたといふ。

關白三藐院殿(三)へ春可(四)の伺候したとき、庭先の櫻がやう〳〵咲いたばかり、一句仕れとの仰に、

霞む目に通すやはりの絲櫻

といふに、さらば我もと關白

宿直

(三)近衛信尹。後陽成天皇に仕ふ。
(四)俳人。朝生軒、鐵亭齋と稱す。松江維舟の門人。寛文中歿。

伺候

鷹野

咲かぬまを待つやしんくの絲櫻

京都の北山高野といふ所に、犬櫻がやう〳〵咲きかけたといふので、見に行くと、

まだらにも咲きさかりたる犬櫻

折る人あらば足に噛みつけ

と花主が高札を建てゝ居る。其の人

鷹野には必ずつるゝ犬櫻

ひきをる人を咎めやはする

と詠んで一枝手折つた。花主さても風流の御方よとて、それから交際したが、翌年其の人が來た時には、花

主ははや死んでしまつた。そこで其の人後を弔つて、

また來んと契りし花の主は早
今は此の世にいぬ櫻かな

狂歌師蔦細道、虎の尾の櫻を

虎の尾と呼べる櫻の花なれば
雪と散りても踏むを恐れよ

東京上野の山に秋色櫻といふのがある。(五)秋といふ娘、ある年父に伴なはれて上野の花見に行つたが、堂の側の井の傍に、醉客のよろめいて、あぶなげなのを見て、

(五)大目氏。江戸の人。享保十年(一三八五)歿。年五十七。これは秋女十三歳の時の事。

風雅
秀逸
佳話

井の端の櫻あぶなし酒の醉

と口ずさんで、短册にしたゝめて下枝に下げた。時の寛永寺の法親王は風雅の道を嗜まれて、枝にかゝつた短册を一々取寄せて御覽になつたが、日頃の秀逸これに越したものは無いと、わざ〳〵秋女を呼出されて、賞賜もあつたといふ。今日九重の伊勢と新古相双ぶべき佳話である。

四　渡舟

坪内雄藏

しだれ柳の影ひたす

西國巡禮

村と村とのさかひ川。
波があや織る土手際に、
今日も人待つ渡守。
雨の日、風の夜、朝夕に
渡呼びつゝ來る人は
旅商人や、村の爺、
町の女房、役場員、
竿かたげたる魚釣や、
獵犬つれし若紳士、
西國巡禮、角兵衛獅子、

小荷駄馬

郵便配達、小荷駄馬。
なりも言葉もいろ〳〵が、
暫し乘合ふ舟の中。
知るも知らぬも知合うて、
語る間もなく向岸、
思ひ思ひにおりたちて、
西へ、東へ別れ行く。
行くを送れば又來る
相手は日々に變れども、
變らぬ流、おなじ主。

休養所　休みばしよ。
慰安所　なぐさめのばしよ。
和樂（平和たのしみ）

岸の青柳、水の月、
波間の鳥もなじみにて、
春秋いくつ重ぬらん。

——國語讀本——

自修文

五　家庭

家庭は我々の休養所であり、慰安所である。たとひ貧しい生活をしてゐても、家族が互に助け合つて、中よく暮して居れば、人の知らない和樂を味ふことが出來る。多くの財産を貯へ、多くの召使をつかつて、豐な暮しをしてゐる者でも、夫婦中が惡かつたり、兄弟の爭が絶えなかつたりして、家庭が圓滿に治らなかつたら、とても幸福な人生は

圓滿中よく行くこと。

晴れやかな心持　はれ〳〵とさつぱりした氣もち。
敬　うやまふこと。

送られない。

圓滿な家庭といふのは、うまい食物が食べたいだけ食べられることでも無ければ、美しい着物が着たい程着られることでも無い。一家の者が相依り相助けて、各其の職務を盡し、いつも晴れやかな心持で暮してゐることである。それ故家庭の圓滿を保つには、家族の間に愛と敬とが無ければならない。即ち弱い者、年下の者は、強い者、年上の者を敬つて、これにたより、強い者、年上の者は、弱い者、年下の者を愛して、これを保護することが必要である。各自分の職分を知つて、まちがひ無くそれを果すやうにしなければならない。

たづさはる　從事する。
本來　もとよりきまつて居ること。

女子は內に在つて、家事にたづさはるのが其の本來の

責任　なすべきつとめ。

勢　しぜんと。

務であるから、家庭の爲には、大きな責任を持つてゐるものと言はなければならぬ。夫が終日外へ出てはたらいて夕方に疲れたからだを運んで歸つて來ても、妻は迎にも出なければ、其の疲をいたはり慰めようともしなかつたり、子供がそばで泣いてゐるのもかまはないで、自分の事ばかりしてゐるといふ風では、家庭の平和が得られるものではない。家庭が面白くないと、勢氣が荒くなつたり、仕事に身が入らなくなつたりする。さうしてそれが家族の不和を一層大きくするもとになる。それ故女子は家庭のうまく治るのも治らないのも、みな自分次第だと思つて、朝夕其の務を盡し、其の責任を全うするやうに心掛けなければならぬ。

六　父の許へ

一筆申上ゝ今日は御父上樣の御誕生日なれば
いつもよりも早起いたし顏を洗ひ髮も結直し
故郷の空はるかに仰ぎて心の中に御祝ひ申上ゝ
去年までは御膝下に居て皆樣と御一緒に御祝ひ
申上ゝが今年は其の事の叶はぬを心苦しく
存じへども学問いたす身には止むを得ぬ事と
あきらめ申ゝ
かく御側を離れ居ては尚更御なつかしく

ふかす

御恩のほどしみ〳〵身にこたへ日に一度は
御寫真取出して御目にかゝるを樂みに致し
朝食後取出しては今頃は宅のあの處に古すわり
なされ烟管をあのやうにして煙草御ふかし
あそばすならんなど思ひまゐらせ夕飯の
後には今頃ははや御休みなされいかなど思ひ
出でてはいつか我が身も古側に居るかの思ひたしは
御友達は多けれども当親のそろひ居る人は
少く私は始終うらやまれ居はかくうらやま

たらちねの

るにつけてもます〳〵嬉しく勉強して居る
うちにもふと郷里のことおもひいだしては
御父上様も御母上様も活機嫌よく入らせらるゝ
こと〳〵何となく心丈夫になりて勉強するにも
張合が出来何家よき成績を取りて一言よく
出来たと御誉にあづかり度と勇み立ちは此の
ほども修身の時に先生より
明治天皇の御製
たらちねのみ親のをしへあら玉の

どしふるまゝに身にぞしみける

といふを取りおもはず落涙いたしは此の頃は何となく時候も不順に御座はへば精々御養生あそばし御息災にていつゝまでも今日の御祝ひ申上げられは様にと神かけて祈り居は今日は夜分に認むる筈の處あまりの御なつかしさに課業がすむとすぐ書きつけ取りあへず御祝の詞のみ申上は

かしこ

月日　花より

第四位に居る

御父上様　御許に

尚々此の度は取りいそぎはまゝ御母上様始め皆様へは直無沙汰いたしはいづれ其の内に又申上ぐべくは

七　東京

大日本帝國の首都東京市は、面積約五方里、町數一千四百六十餘、人口二百三十餘萬を數ふ。人口よりいへば世界大都の第四位に居る。

莊嚴光景

天皇陛下のいます宮城は市の中央に在り。二重橋外の廣場より御堀を隔てゝ宮殿の御屋根を拜し奉る、莊嚴なる光景世界に比類なし。

宮城の周圍は麹町區なり。二重橋より南して櫻田門を出づれば、海軍省、司法省、外務省、霞ヶ關離宮、貴衆兩議院等宏壯なる建築多し。海軍省、司法省と背中合に日比谷公園あり、廣袤五万四千餘坪。外務省の附近霞ヶ關より永田町にかけては、露西亞、伊太利、白耳義等の外國の使館相接し、總理大臣、大藏大臣、文部大臣、陸軍大臣等の官邸相つゞく。其の他陸軍省、參謀本部、

宏壯廣袤

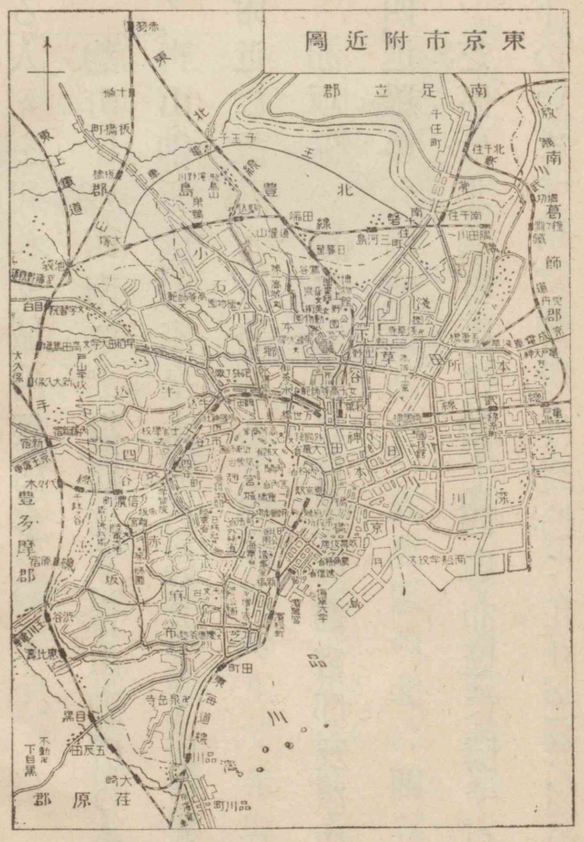
使館

官衙

大藏省、內務省、文部省、鐵道院等の諸官衙、英、佛兩國の大使

散在

館、支那公使館、墨西哥公使館等も皆區內に散在す。有栖川宮、伏見宮、閑院宮、山階宮等皇族方も、多くは居を



區内に占め給ふ。九段阪の上には有名なる靖國神社あり、維新前後及び明治以後の戰役に、國家に殉じたる人々を祀れり。域内櫻樹多し。

麹町區の西南に赤坂區あり、青山御所のある所なり。青山御所は昭憲皇太后のいましゝ所なり。御所の附近に故乃木大將邸あり。

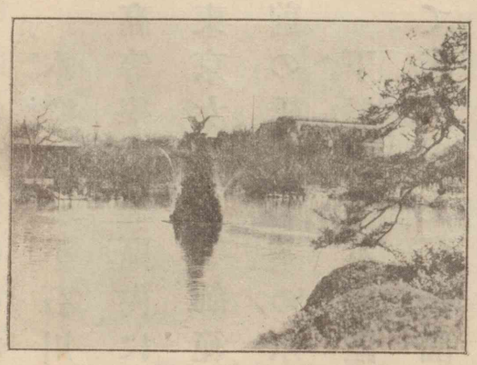
赤坂區の南麻布區には東久邇宮邸及び葡萄牙、瑞西、暹羅の外國使館あり。

芝區は北麹町區に接し、西麻布區に隣す。皇太子殿下のいます東宮御所は高輪に在り。芝公園内の增上寺は徳川氏の廟所として知られ、高輪の泉岳寺は四十七士の墳墓を以て名高し、又慶應義塾大學あり。

(一)浄土宗の關東總本山。三緣山と號す。

廟所

(二)浄土宗。徳川家康の母水野氏傳通夫人の墓あり。



日比谷公園

赤坂區の北に四谷區あり。四谷區の北に牛込區あり。四谷、赤坂兩區に跨りて赤坂離宮、牛込區には陸軍砲工學校、陸軍士官學校等あり。早稻田大學は區の西北に隣接す。

牛込區の東と北とに連れる小石川區には、陸軍砲兵工廠あり。寺院の著名なるは傳通院(二)、護國寺にして、

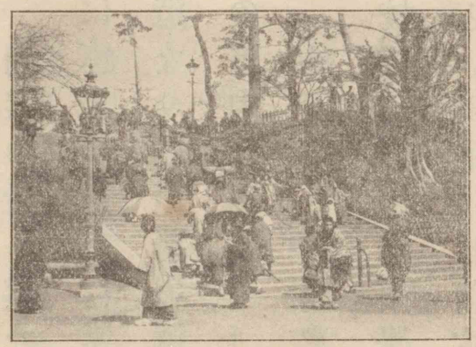
鬱蒼

學校には東京高等師範學校、日本女子大學校をはじめ、盲學校、聾唖學校等あり。

本郷區は小石川區の東にあり。東京帝國大學、第一高等學校等區内に在りて、學生の住居するもの多し。東京女子高等師範學校は區の南部に在りて、校門の前の橋をお茶の水橋といふ。

下谷區は本郷區の東にあり。上野公園、不忍池を以て名高し。上野公園は面積十九萬五千餘坪、長松老杉鬱蒼として、櫻樹其の間に交れり。惜しむらくは近年老樹の枯死するもの多し。公園内に、東京帝室博物館、

指點



上野公園

動物園あり、四時の遊覽者絶えず。東京音樂學校、東京美術學校、帝國圖書館等亦公園内にあり。公園の高地より、西は不忍池を隔てゝ本郷區を望むべく、東は下谷區の東半部と淺草區とを見下して、淺草區に名高き觀音堂をも指點すべく、又遙に隅田川を隔てゝ深川、本所の両區をも望むべし。隅田川は市の東部を流るゝ川にして、吾妻橋、厩橋、両國橋、新大橋、永代橋の五大橋を

架せり。市内十五區の中、本所、深川の二區のみ其の東に在り。此の両區には各種の工場多し。

商業の最も盛なるは日本橋區、京橋區にして、ともに宮城の東方に當れり。京橋區の一部分は全く煉瓦造なり。農商務省、遞信省、海軍大學校、瑞典公使館等此の區内にあり。

神田區も亦商業の盛なる所なり、共立女子職業學校、東京高等商業學校、東京外國語學校等あり。神保町といふ通には、新古の書籍を商ふもの多し。

人家櫛比の大都會とて、火災の起ること尠からざ

櫛比

れども、今は消防の設備行届きて、大火災を見ること漸く稀なり。

設備

自修文

八　神田の大火事

田山花袋

「ひどい火事ですな。まだ燃えてゐるさうですな。」

かう御用聞が、朝來て言つた。昨夜、風の凄じく吹荒るゝ最中に半鐘が鳴つた。何處か火事だなと思つたが、寒いので出て見もしなかつた。それが非常な大火事で、神田一面は既に灰燼に歸して、今は火は日本橋、淺草に及ばうとしてゐるといふことであつた。風はいくらか凪いだが、まだかなりに強く吹荒れてゐる。其のためかどうか知らぬが、

凄じく　ものすごく。

灰燼に歸す　みな燒けてしまふ。灰ははひ、燼はもえさし。

今朝は新聞も來ない。私は朝飯を食ふと、急いで飛出した。

明治二十五年三月某日だ。

神樂坂(一)まで出ると、四邊がどこと無く、そは〳〵してゐるのが目に附いた。人々が火事の方に向つて走つてゐる。

「もう、消防が勞れて、どうする事も出來ないさうだ。」などと誰か言つてゐる。牛込見附を入ると、人は織るやうに行きちがつてゐる。私は急いで九段の上へと行つた。先づ最初は高い所から見下す方が好いと思つたのである。

九段の坂の堀に面した土手のうへには、群集が黑山のやうに集つてゐた。そこから、昨夜の火事の跡が一面に打渡されて見えた。成るほど凄じい光景だ。燒拂つて行つた街々は、一面の焦土と化して、薄い烟と塵埃とで包まれ、其の向ふには、火の手が二つにも三つにも分れて、黑い烟が

(一)牛込區内。そは〳〵何となくおちつかないさま。

打渡す　見とほす。

焦土と化す　やけたつちになる。

塵埃　ちりほこり。

簇々(二)と群り渡つてゐるのが見える。「鍋町(三)だ、もう。一方は大通に出たかも知れない。十軒店も危い。」こんな事をそこで見てゐる人達は言つた。

「夜なら見ものだらうな。」

かう一人が言ふと、一人は、

「昨夜は綺麗だつた。何とも言へない位だつた。」

かう言つて眺めてゐた。

私は九段の坂を急いで下りて、鎌倉河岸(四)の方へ行つた。

堀端(五)——高等商業あたりは、人やポンプや警官が群集してゐるので、通ることが出來ない。仕方がないから、丸の内(六)のなかへ入り、印刷局の前を通つて、常盤橋(七)へ出で、本町の方へと行つた。到るところ凄じい光景である。どの家でも、

簇々　むらがるさま。

(二)神田區内。

(三)日本橋區内。雛人形などの市の立つ處。

(四)神田區内。

(五)宮城の外堀以内で、御所の東北にわたつた部分の稱。

(六)(七)共に日本橋區内。

類燒　もらひ火でやける。
鳶のもの　火けし人足。
海嘯　つなみ。
(八)日本橋區内。

類燒を覺悟して、庫はしつかりと塗りこめ、荷物は出し、老若は避難し、出入の鳶のものは、火事裝束で、ポンプをかけたり、屋根に上つたり、火の來る方向を望んだりして、夢中になつて働いてゐる。黑い烟が湧くやうに凄じく此方に靡いて來る。家屋の燒ける音、物の滅びる音、それに人間の抵抗する音、ゴーと電線に鳴る西風の音、さういふものが一つになつて、凄じい地震か、でなければ海嘯でも押寄せて來るやうな氣勢がするのである。……何とも言はれず凄じい。

私は大通へ出て、十軒店に行つた。(八)今川橋以北はまるで烟と、焰と、人と、ポンプとで埋つてゐる。とても通れない。「鍋町へ出た、角へ出た。」かう言ふ聲が、何處からとなく聞えて

(九)神田區内。
辛うじて　やつと。
喧噪　さわがしさ。
恐怖　おそれ。
(一〇)明暦三年(一六五七)正月十八日本郷區菊坂本妙寺から出火。二日に亘つて燒けつゞけ江戸市の大半を燒いた。振袖に恨が殘つてそれから出たといふ傳説がある。
頭に蘇る　思ひだされる。

來る。

今川橋はとても渡れさうにもないので、其の次の橋を渡つて、もとの昌平(九)橋の通を向柳原の方へと辛うじて行つた。到るところ混雜と喧噪と恐怖とで街はざわついてゐる。

しかし幸に大通にちよつと出ただけで、火は消止めることが出來た。

それから數日の間は、新聞は火事の記事ですべて埋められた。人々の噂も火事の話ばかりである。昔の振袖(一〇)火事、さういふ時の大火の話まで、人々の頭に蘇つた。

——東京の三十年——

九　いろはガルタ

遭遇不慮の禍

兒童のもてあそび草にするいろはガルタの教訓こそおもしろけれ。これには東京を中心として東國地方に行はるゝものと、京都を中心として上方及び西國地方に行はるゝものとの二種あり。今とり交ぜて、其の中の主なるものをいはん。

「犬もあるけば棒にあたる。」は犬の出歩きて何事にか遭遇するを言ひたる語。出歩くために、不慮の禍にあふ事ありといふ本義なるべし。轉じては、又幸運にめぐり遇ふ意にも解せらる。

「花より團子。」は風流よりも實利を喜ぶ人情をあらはしたり。西洋にも「鳥の聲よりも麵包。」といふ諺あり。

「塵も積れば山となる。」は貯蓄のよき教といふべく、徳を積むも同じかるべし。

「笑ふ門には福來る。」は我が國民の快活なる氣象をあらはせるもの。家庭の安和は繁昌の基たること言を待たず。

「念には念を入れよ。」は成功の秘訣なり。

「樂あれば苦あり。」は「苦あれば樂あり。」と倒にもいふ。

處世　べく、處世の誡とすべし。

「氏より育ち」は教育の大切なるをいへり。

苟且　「咽もと過ぐれば熱さ忘る」は苟且なる人情、物に懲りぬを誡めたるなり。

いづれか、あらざる　「負けるは勝」「播かぬ種は生えぬ」「油斷大敵」等いづれかよき教訓にあらざる。

市井の人　嗜好　卑陋　いろはガルタの中には、昔の製作なれば、今の時世の人にはむづかしく解し難きあり、また市井の人の嗜好にや出でけん、卑陋にして面白からぬもあれど、概してはよき教訓を含めりと言ふべし。

概して

一〇　眞の人

古き歌に、

人多き人の中にも人はなし
　人となれ人人となせ人

といへるあり。天地の恵を受けて、人と生れ出でたる上は、誰しも人の中の人となりて、よき名を保たまほしきことなり。人の中の人となれとは、世に大いなる勳を立て、後の世までも敬はるゝ身分となれといふのみにはあらず。其の心を直くし、其の行を正しくし

身分

俯しても仰ぎても

門地

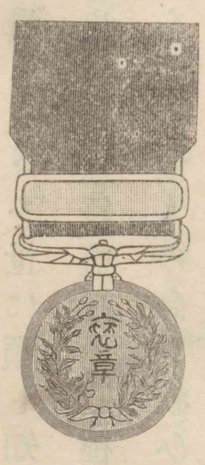
禽獣の心

て、俯しても、仰ぎても、天にも地にも恥ぢぬ人となれといふなり。世には富貴にして、却りて心の貧しき人あり、門地高き家に生れながら、其の行の極めて卑く賤しきあり。身分門地の如何によらず、心の高く貴き人をこそ眞の人とはいふなれ。

眞の人は我が身をも忘れて人の爲に盡さんと思ふ。これ貴き心の外に現るゝなり。我が身一人よければ、人は如何様にても構はずといふは、人にして禽獣の心あるなり。親に對しての孝、夫に對しての貞、さては主人に對しての義理も、他人に對しての慈善も、皆

犧牲的精神

己を第二にして、人の爲に盡さんとする眞心より出づるなり。人の爲に盡さんとする眞心は、即ち犧牲的精神にして、其の心の外に現れたるは、即ち犧牲的行爲なり。人の心としては、犧牲的精神より美しきはなく、人の行としては、犧牲的行爲より貴きはなし。



人の危難に陷れるを見ては、我が身の危きをも忘れて之を救はんとし、人の難儀に沈めるを見ては、我が身の困苦を物ともせず之を除かんと努むるは、唯此の美しき眞心より出で

はた

て、此の貴き行爲となるなり。かゝる事例は古來尠からず、今の世にもはたいと多し。

綬

明治十四年に褒章條例の制定あり。これは、此等の貴き人々を世に顯し知らしめん爲なるべし。褒章には紅綬、綠綬、藍綬の三種あり。紅綬褒章は自己の危難を顧ず、他人の命を救ひたる者に賜ひ、綠綬褒章は孝子、順孫、節婦、義僕、又は實業に精勵して衆人の模範となる者に賜ひ、藍綬褒章は學問技藝上の發明、改良、著述、教育、衛生、慈善、防疫等の事業、學校病院の建設、道路、橋梁、堤防等の修築、田野の開墾、森林の栽培、水產の繁

模範

事績

殖、其の他一般農商工業の發達に關して著しき事績をなし、公衆の利益を興したる者に賜ふなり。此の外、明治二十年には、別に黄綬褒章を定められて、海防事業の爲に獻金したる者にも賜ふこととなれり。

海防

かよわき

多くの私財を抛（なげう）ちて公衆の事業に盡すが如きは、富者ならではなし難かるべし。然れども多くの善行は心がけ一つによりては、身貧しき人もなし難きにあらず。又かよわき一少女にても、出來得べからざるにあらず。事業の大小はしばらく言はず、常に人の爲に盡さんと思ふ眞心だにあらば、其の眞心はいつか

だに

外にあらはるべきなり。されば明治十四年以後、褒章を受けたる人々の數は、今日に於て既に數百人の多きに上り、其の中には身分卑く、家貧しき人も少からず。たとひ如何に卑き身分なりとも、此等の人々は皆人の中の人にして、誠に尊ぶべく、敬ふべきなり。

人の中の人

我等はもとより勉勵刻苦して、家を興し、産を殖さざるべからず。然れども、不義にして富めりとも何かせん。常に其の心を正直にして、眞の人たらんこそ望ましけれ。

不義にして富めりとも何かせん

一一　小木曾つぎ

小木曾つぎ女は、岐阜縣土岐郡曾木村の人なり。此の村は岐阜縣の模範村として、縣知事より表彰せられたる程なれば、村民大方質朴にして、勤儉貯蓄の風に富めり。

表彰
質朴
勤儉貯蓄

然るにつぎ女の父は少しも産業を修めず、家甚だ貧しければ、つぎ女は一箇年間學校に通ひたるのみにて、八歳の時よりは子守奉公に出されたり。かくて後は、近村の誰彼の家に下女奉公し居たるが、給金は父いつも前借し行きしかば、一厘半錢とても手に入

誰彼の家

りたる事なし。つぎ女は之を悲しむにあらざれども、我が年中の辛苦が、空しく父の一夜の酒代となるを思ひて、如何にもして、父の行を改めしめんと、心を砕かざる日なかりき。

心を砕く

従兄

水の泡

折しも、長野なる某醫師の家に奉公せる従兄の許より、「我が仕ふる主人の家に女中の入用あり。良き主人にて、末の爲にもなるべし。心を決して來らずや。」と言越したり。つぎ女つく〴〵考ふるに、遠方にあらば給金の前借もかなはざるべく、年月の辛勞の水の泡となる事もなかるべしと、遂に意を決して其の言に

従ひぬ。時に年二十なりき。

つめ〳〵しく

境遇

正業に就く

かくて主人大事とつめ〳〵しく立働きて、年二十圓の給金をば、成るべく使はぬやうにして預け置きしが、僅か二年餘の後に、凡そ四十圓ばかりの貯金を得、喜び勇みて故郷に歸れり。

家に歸れば、父は以前に變らぬ不身持にて、村民に爪彈せられ、何人も言を交へざる程のあはれなる境遇に居たりき。つぎ女は涙を流して父を諫め、携へ歸りし金を父の前に差出して、「これを資本として、正業に就かせ給へ。」と請ひぬ。

殊勝の志
翻然
部落

八歳の幼き時より、苦勞に苦勞をかけ、使はるゝだけ使ひしのみにて、かつて親らしきふるまひしたる事もなきに、只一心に親を思ふ眞心より、年若き身のほしかるべき衣髪の飾ともせで、貯へ得たる金子を差出したる殊勝の志、さしもの父金作も、翻然として身の過を悔いぬ。

金作はこれより生れ變りたる人の如く、朝は早くより、夜は遲くまで、專ら農業を勵みしかば、次第に家産も出來、村民の信用をも得て、後には一部落の組長にまで推さるゝに至れりといふ。少女心の一筋に父

をゝしさ
けなげさ
名に負かず
起居行爲

の非行を改め、家産を興さしめしをゝしさ、けなげさ。曾木村はつぎ女を出したるのみにても、模範村の名に負かずといふべし。

一二　時計

我が部屋の文机の上に小さき置時計あり。形こそ小さけれ、我に取りては此の上もなき寶なり。朝に夕に我の最も親しむ友なり。毎日毎日我が起居行爲を規則立たしむる眞の益友なり。

とりわけ、夜の更行くまゝに、我は彼と相對して常

訓誡

四隣寂として聲なし

ためらふ

よすがら

に訓誡を受くるを覺ゆ。彼の針の十時を指さす頃は、四隣寂として聲なく、をり〳〵犬の遠吠を聞くのみ。其の時彼は我に告げて、「日月の過ぐるは流るゝ水よりも疾く、しばらくもためらはずして過行くなり。友よ、我がごとく絶間なく勤めよ。夜は更けたれども、我此處にあり、我はよすがら眠ることなし。」とさゝやくが如し。讀書に心を奪はれて、何時しか彼あるを忘れ、ふと思ひ出でて、彼が面を見れば、いつしか十一時となれることもしば〳〵なり。

チヨキ、チヨキといふ小さき音は、我が眠れる間も

ひねもす

休まず、翌朝我が起出づる時は、彼の長き針と短き針とは、いつも縱に一字をなせり。それよりも遲れて目覺めし日は、彼は我を誡めて、「今日はなど遲かりし。」と言ふが如く覺ゆれば、心はづかしくて、ひねもす快からぬなり。

一三　舊師に贈る

一筆啓し上は進々暑さに向ひ申は変先生には
御変もなく御機嫌よくいらせられは事
出めでたく存上は降つて私事御蔭様にて

女學校に入学致いてよりはや三月に相成いへども未だ一度も缺席はもとより遅刻も早退もせし事なく先生の御教をまりてよく遊びよく学び居いへば御安心下されたくは初は英語殊にむづかしく誠に骨が折れい更今はやうく慣れて其の日その日に後れぬ様に相成り申い校長先生はじめ諸先生方誠に御親切に御教へ下され上級の方々は優しく御いたはり下され同級生とも心易く何も案ずる様の事これなく何よりの仕合と存居い松田様竹内様とは学校の

御詫びかたが、

(一)川越の城主。寛文二年(二三二二)歿。年六十七。

功業

老中

往復に誘ひ合ひい事度々これありいつも先生の御噂のみ申居いいづれ夏休にはゆるゝ御伺ひ申上ぐべくと楽しみ居い先は御無沙汰御詫びかたゞ近況御しらせ申上いかしこ

一四　智慧伊豆守

大町桂月

智慧伊豆守とは松平(一)伊豆守信綱のことなり。其の伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと尋ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中となりたり。されど、老中となりたればとて、特に智慧

の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原(二)の亂を平げたり。されど、島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。されば智慧伊豆守の名は何によりて得たるか。

或時將軍(三)鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際、將軍之を味はんとす。急の事とて、老中ども雲雀を金串に刺して燒くに、火强く、手先熱して堪へられず、急げば急ぐほど早く燒けず、大いに困り居たり。伊豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それに金串を刺して燒くに、火熱手に及ばず、やすくと燒くを得たり。

(二)天草一揆ともいふ。寛永十四年肥前國島原に起りし天主教徒の亂。

(三)三代將軍家光。(一六〇四―一六五一)

舌を捲く
假初
頓智

而も最も後に燒始めし伊豆守が、最も早く燒終へたり。他の老中ども舌を捲き、「平日の勤はとても伊豆守に及ばず。かやうなる假初の事だにも仕負けたり。」とて笑ひたりとぞ。これ一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、(四)和田倉橋邊にて、堀の水鳥を追立てよと命ず。しかるに何處を見ても小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣り居るを見て之を買取り、石の代りにして之を投げ、水鳥を追立てたり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧

(四)今の宮城の内堀に架したる橋。二重橋の東北。

伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて、(五)八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬにはあらねど、忽ち築き、忽ち取除くは無益なり。乃ち伊豆守の指圖にて、籠屋に命じ、數百千の竹籠を造らせ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場が出來たり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心がけの如何にも由るなり。請ふ、伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向つて、「如何にして智を得たるか。」と問ふ。答へて曰く、「これ我一人の力にあらず。何人の智も、もと格別の差なきものなり。もし我に智ありとせば、そは此のもののお蔭なり。」とて足を見せたり。其の足の甲に畏(かしこ)りだこ四つ五つあり。足の甲にたこあるは正坐謹聽に慣れたればなり。

伊豆守曰く、「我が實父(六)も養父(七)も、家康公、秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とをよく〳〵存じたり。我は幼少の頃より正坐して、實父、養父の教を謹聽せり。秀忠公(八)、家光公の御側に晝夜相勤めたり。かくて足には

(五)麹町區丸の内大手外郭の南にあり。

正坐謹聽

(六)大河内久綱。(七)松平正綱。(一二三六―一二三〇八)

才覺

(八)二代將軍。(一二三九―一二九二)

たこが出來たり、心には才覺が出來たり。」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜物なり。今の世の少年少女たるもの、豈伊豆守の足だこに就いて學ぶ所なかるべけんや。

なかるべけんや

臨終發揮

伊豆守の臨終は、殊によく智慧伊豆守の實を發揮せり。伊豆守病んで將に死なんとせしとき、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させ、之を新しき藥研に入れて燒かせたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を燒きけるぞや。其の中には世間に洩すべからざる秘密の事もあるべし。されど多くは伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらば、ゆゝしき事なり。故に一切之を燒きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら沒したり。嗚呼、これ智慧伊豆守が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆守の智慧伊豆守たる所以なり。

(九)徳川家綱。(二三〇一―二三四〇)

ゆゝしき事

―すゞりの水―

一五　花の色

三好學

花は植物の體の中で一番目立つ部分である。其の

色彩　濃度多様

形の美しいことは言ふに及ばず、種々の色彩を現し、又香さへも加つて、遠方から見ても其の所在が知れるやうに成つて居る。

花の色の種類と濃度とは非常に多様である。花のみならず、葉の色でも、決して一様の綠色ばかりではない。綠色の種類に屬する色の中でも、濃いもの、淡いもの、又黃色、橙色の混り加減など、變化の範圍は極めて廣く、精密に調べれば綠色の中で數百種を區別することが出來る。花もこれと同じことで、均しく紅色の花の中にも數多の種類があり、また紫色、藍色など

色素

にも、それ〴〵多くの區別がある。また色素が全く脫けて白になつたものや、極めて濃厚な赤紫で、殆ど黑色に見えるものもある。今日人工的に造られるアニリン染料には、無數の色の種類が出來てゐるが、それ等の色は、花に於ても實際に現されてゐるものが少くない。

すべて花の色は、見所によつて一樣でない。光線の反射の强い所と弱い所とでは、同じ花でも、其の色が多少違つて見える。室內と室外では、花の色が同じでない。全體花の表面には、表皮の細胞の外壁が突出し

光澤

て天鵞絨（ビロード）のやうに成つて居り、光線を或は強く反射し、或は屈曲するが故に、水彩畫などに現れたものと違つて、特殊の光澤が出て居る。此の光澤は、花の色をして一層著しくならしめるものであつて、殊に光澤の強い花では、恰も一種の色が光を放つやうに見える。かくの如き花を描くには、其の光澤を十分に現すやうにせねばならぬが、それは頗る困難である。

朝顏の花は、頗る色の變化に富んでゐるもので、赤の部分——赤、黃、橙——に屬する色が種々あると同時に、また青の部分——青、藍、紫——に屬する色も數多く出て

居る。殊に紫、瑠璃、藍などが強く現れて居り、又茶色や、殆ど黃色に類したものすらも出て居る。其の他ヒヤシンスなども、花色の種類の多い方で、赤や青の兩方の色彩を現し、其の濃淡の上に於ても、頗る多樣の變化がある。燕子花（かきつばた）、花菖蒲、溪蓀（あやめ）の類も亦色の種類が多く、青の部分に屬した色彩の外に赤色も現れ、又青紫色も出てゐる。けれども黃色に至つては、かの黃菖蒲を除く外は現れてゐない。尤も普通の花菖蒲にも花の一部黃色い所があるが、未だ此の部分を特に發達させて全體に及すことは出來ない。菊の種類は普通

原色

黄色が本で、それに赤が混り、茶色が出來てゐる。ダリヤなども赤、黄の部分の方が本色であるが、併し多少紫色も現れて來て、變化の範圍が段々大きくなつた。又蝦夷菊は紫色が普通であるが、赤も出來、白も現れて居る。此の外、櫻、梅、桃などは大抵皆赤に屬する色を現して居り、躑躅などは此等と同じく赤色である。尤も種類によつては、紫がかつたものも無いでは無い。

すべて花にはそれ〴〵原色があり、野生の狀態にあつては原色だけを現して居るが、稀には原色から多少變つて、或は濃く、或は淡く、又は全く色が脫けて

白くなり、或は絞となつたものが出來る。併し野生花では、此の色の變化は極めて少く、唯稀に見ることが出來るのみである。然るに一旦培養せられて、發生上の變化が起ると、之に伴つて色彩の變化も起つて來る。其の變化の範圍は、各自の花の種類によつて一樣ではないが、いづれも多少の變化を起さないものは無い。殊に變化の性質の大なるものは、一擧にして數多の色彩を現して來る。即ち培養されてからまだ年月の淺いにも拘らず、野生の花にも絶えて見られない著甚な色彩が出て、赤から紫、藍が現れ、また白が

出來、更に中間の色が種々に生じて來る。かの花菖蒲の如きも其の一例で、野生の赤、紫の花から、現に無數の變色花が生じて來たのである。

世界中美しい花のある所は少くないが、殊に有名なのはブラジル(一)國である。同國には美しい花の咲く植物が非常に多く、世界各國の溫室で培養してゐる美しい植物は、大抵同國から出たものである。中でも蔓に成る草木で、美花をつけるもの、或は草花の種類の如きものには、極めて鮮美な色彩を有してゐるのが多い。印度、馬來(二)地方のやうな熱帶の國々にも、無論

(一) Brazil. 南亞米利加洲にあり。熱帶に屬す。

(二) Malay. 亞細亞洲の最も南端の半島。

美色を呈する花はあるが、其の類に於て、到底ブラジル國に及ばぬ。概して熱帶の草木は、溫帶地方に於ける草木よりも花色が濃厚で、強い色彩を現してゐる場合が多いが、それは多く境遇によつて然るものである。美觀上より見ても、熱帶の如き萬緑の中に於ては、淡い色彩の花は更に目立たず、又太陽の光の強い所では、極めて濃厚な色彩でなければ、十分鮮に其の美を發揮することが出來ない。それ故熱帶地方に行くと、誰しも花の色の濃くて著しい事に氣がつくが、これは自然の狀態が、自ら然らしめたものである。

然らしむ

自修文

一六　花菖蒲の美觀

三好學

花菖蒲は元來濕地又は水邊の植物で、現に水田に培養せられてゐるのを見ても、其の性が如何なる場所に適してゐるかが分る。隨つて、出來るだけ其の場所を選ぶはよいが、これを燕子花に比べれば、稍水分の少い場所にでも培養することが出來る。此の花の咲く時は、ちやうど梅雨の季節で、日々小雨が降り、又時々日光が射して、所謂陰晴定まりなき時である。此の頃は一帶に空氣が濕つぽく、蒸暑く、ちやうど萬緑の時季で、春先に咲く黄色や淡桃色の花は無く、多くは濃厚な色彩を帶びた花例へば紫陽花のやうな藍色の花などが咲くころである。隨つて、花菖蒲のやうな色彩の濃厚なものが、此の季節に最も適當してゐる。此の花が雨に濡れた所へ、ぱつと日が當つた有樣は、誠に美しい。殊に濃厚な瑠璃色、紫色、又純白なものは、一層目立つて

陰晴　くもつたりはれたり。

花菖蒲

方式 かた。ふう。はうは

堤塘 つゝみ。

逍遙 ぶらく〳〵あるくこと。

見える。

花菖蒲を栽培するには、其の植方が自ら一定の方式に適はなければならぬ。所謂方式とは色の配合をよくすることで、例へば池なら池、田なら田に、前に述べた種々の單色、混色の花を、一かたまりづつ、巧に配合して植ゑ、全體を眺めて色の調和が保たれ、しかも變化の順序が面白く現れるやうにしなければならぬ。たゞ無意味に植ゑつけるのみでは、色彩の配合や變化の順序が現れない。これは獨り花菖蒲のみに限らず、菊でも、朝顏でもおなじことであるが、殊に花菖蒲のやうに水田に栽培し、田畝堤塘の間に逍遙して之を賞觀するものに在つては、一層此の植方に注意しなければならぬ。現に菖蒲園に行つて見ると、大體

餘地 あまる所。すきある場所。

風土 氣候地味。

純粹

雲泥の相違

は此の方式に適つて居るが、なほ改良の餘地がある。とにかく、花菖蒲は我が邦固有の植物で、殊に初夏の花として最も美しいもので、昔からこれを賞美する慣習になつてゐるのを見ても、それがよく我が邦の風土に適してゐることが分る。

一七　海王國の婦人

肝付兼行

我が國は純粹の海國で、イギリスと東西相對して、世界に類稀なる國でありますが、此の兩國民の風俗習慣を比べますと、實に雲泥の相違を發見いたします。こゝに壯快な話がありますから、其の御話をして、

一斑

かれの習慣風俗の一斑を窺ふことにいたしませう。

我が國より南少し東へ、約四千五百哩を隔てゝ、南緯約三十四度から、四十八度の邊に達する一つの島(一)國があります。此の島國は南島、北島に分れて、イギリスの殖民地でありますから、其の風俗も全くのイギリス風で、國人は一般に海軍を重んじ、海軍士官を貴びます。

(一)ニューヂーランド。New Zealand.

明治十八年の事でしたが、練習艦筑波が遠洋航海をして此の地に參り、北島のオークランド(二)といふ港に寄りましたとき、其の地の人民は我が海國士官を

(二)Auckland.

優待

周旋饗應日もまた足らぬ

非常に優待しました。市會の議長、議員等は、其の夫人、令嬢と共に百事に周旋し、我が士官を饗應するに、日もまた足らずといふ有樣でありました。加ふるに市長グラム氏は、少し隔つた海岸に、溫泉の出る別莊を所有して居るに任せ、是非其の地へ船を廻して遊べとの勸でありました。そこで我が艦長は、折角の厚意を辭するに由なく、廻航の約束をしましたが、其の翌日突然公命の電報が參つて、俄に港を出發することになりました。それゆゑ約束に背く申譯、かつは過日來の待遇に對する謝辭と離別の辭とを述べさせる

選りに選る

いぶかし

舷梯

何ぞ圖らん

爲に、總員の代表者として、一士官をボートに乘せて出しました。然るに、當日は海が荒れてゐた故、漕手をば乘組三百名のうちから選りに選つて遣りました。此の穩ならぬ海上を、我がボートと行違に、陸の方から本艦を目ざして、一小船に帆を揚げ、白波を蹴立てて快走して來るものがあります。そこで我が艦員はいぶかしく思つて、見て居りましたが、やがて本艦に着して、舷梯を上り、舷門にはいつて來るのを見ますれば、何ぞ圖らん、前日の饗應に周旋した貴婦人、令孃たちでありました。まして其の乘組總員八名、一人の

抜錨

(三)名は品之允。感に打たる

(四)Anglo-Saxons. 英國人のこと。

長大息

男子をも交ぜないとは、實に意外でした。これは新聞紙で我が軍艦抜錨の報を見て、告別の意を表せんが爲に來たのであります。

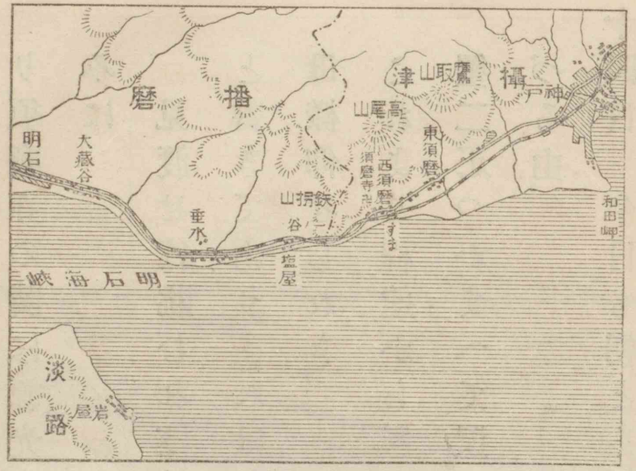
これは、當時の艦長であつた有(三)地中將の、感に打たれての物語でありました。女子に此の勇氣があればこそ、アングロ・サクソン民族(四)が三億八千萬の人民を支配して、其の領土に日沒を見ないのであります。英國の今日あるは決して偶然ではありません。我が國の一般婦人の風と比べましたならば、皆樣はどんなお感じが浮びますか。私は長大息の外ありません。

一八　須磨日記

坪内雄藏

七月十一日　須磨(一)の叔母様の許へ行くとて、姉様と京都より汽車に乗る。空晴れて暑き日なり。神戸よりさきは海見えて、冲には白帆の行きちがふさま、繪のやうなり。其のうちに驛夫が、「須磨、須磨」と呼ぶ。叔母様のお宅はステーションよりぢきなり。「あれ、屋根が見えるそれ門が見える。」といふうちに着く。叔父様も、叔母様も、「より來た、より來た。」と幾たびも仰せられたり。

(一)攝津國武庫郡。神戸市の西南約一里半。



須磨附近の略圖

十二日　朝、叔母様、姉様と一緒に、海濱を歩きて貝を拾ひ、用水池、月見の松の邊まで行きて還る。姉様と貝にておはじきをして遊ぶ。

十三日　朝、姉様と庭を掃く。

夕がた涼しくなりて、叔母様、姉様と三人にて須磨(二)寺に詣づ。まづ敦盛(三)の

掃く

(二)福祥寺の一名。

(三)平經盛の子。無官大夫といふ。元暦元年(一一八四)一の谷の戰に熊谷直實に討たる。年十六。

首塚といふを見る。此の寺にはいろ〳〵の寶物あり。須磨寺の隣に源光寺といふがあり。そこの石ぶみに、

見渡せば眺むれば見れば須磨の秋

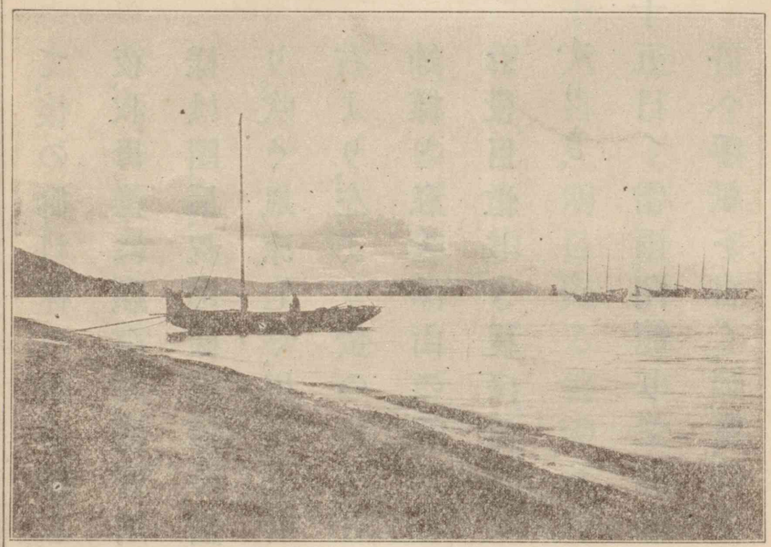
と書きてあり。「これは芭蕉(四)といふ人の句なり」と、叔母樣仰せられき。

これより程遠からざる路守川の邊まで行き、平家蟹二疋つかまへて還る。夜は此のあたり螢多く出づる由。

十四日　今日も朝とく起きたり。姉樣と連立ちて、海

(四)姓は松尾。伊賀國の人。有名の俳人。元祿七年(一六九四)歿。年五十一。

さなから



須磨の海岸

邊へ行く。はだしになりて、わざと波に洗はす。ちよろちよろとはひ來る波、さながら生きてゐるやうなり。和泉の山山、淡路の島など、姉樣指ざして教へ給ふ。また貝を拾ひ、暑くならぬうちにと

御料林

紗の螢籠

て、後の御料林の中を歸る。

夜、叔母樣に願ひて、路守川の邊まで螢狩に行く。姉樣は團扇、叔母樣は紗の螢籠、私の持ちしは笹竹なり。吹く風凉しく、川の上、橋のほとり、葦の中、草の陰、右より、左より、螢の飛びちがふ樣、誠に美し。

姉樣と私と澤山の螢をとり、叔母樣は籠に入るゝお役目忙しき程にて、此のやうなる面白き事は無かりき。

十五日　雷雨。閉籠りて外へは出でず。京都の友達の許へ手紙を書く。姉樣、側よりのぞき見て、「をかしき事を書く子よ」とて笑ひ給ふ。姉樣とおはじきして遊びし事、螢狩の事など書きたれば。

十六日　明日歸る筈ゆゑ、今日は叔母樣、姉樣と町へ行き、土產物を買ふ。松露の罐詰二つ、貝細工の簪（かんざし）二本。此の夜遲くまで話す。

——國語讀本——

罐詰

翁

一九　大和の孝子と芭蕉翁

吉岡鄉甫

昔大和國高市郡武內村に貧しい百姓がありました。老いて妻に先だたれ、一人の娘と一人の息子との

養を受けて居りました。娘はお今といひ、弟は長兵衛と申しました。長兵衛は少しばかりの田地を耕してしまへば、桶の箍替をなし、お今は他家へ下女奉公に出て居りました。長兵衛は毎朝早く起き、飯を炊きて父にすゝめ、朝飯後、村中を廻つて桶の箍を替へ、晝飯に歸ります。まづ父にいろ〳〵の物を調へて馳走を致し、撫で摩り、世間話などして慰め、午後は又仕事に出で、夕方歸り、夕飯を拵へて父を饗します。おいしいものは父にさゝげ、自分はいつも粗末なものばかりいたゞいて居ります。

拵ふ

姉の孝行も決してこれに劣りません。他家に奉公をして、勤に暇の無い身でありますけれども、仕事を人一倍餘分に致しまして、朝夕少しづつの暇を貰ひ、十町ばかりの道を走つて、實家に歸つて孝養を致します。暑い時には團扇で扇ぎ、寒い時には柴を焚いて溫め、背を摩り脚を揉み、所謂「色に先だちて意を承くる」で、かゆい所に手の届く様にして上げます。貧しき中にも父はかやうな姉弟を子に持つて、朝夕行届いた孝養を受ける其の喜は如何ばかりでありましたらう。親子三人水も入らぬ此の家庭には、黄金、銀の光

人一倍

色に先だちて意を承く

水も入らぬ

こそなけれ、平和の光はいつも三人の頭上に輝いて居りました。

然るに、如何なる邪神の惡戯でありましたらうか、或年疫病がはやりまして、大事な父が生憎其の病に罹りました。姉弟は大いに驚き、足らはぬ中にも醫師を迎へて、百方治療看護を盡しましたが、一向に其の驗が見えません。たゞ惡くなる一方なので、二人は心配して、夜の目も合さず、帶紐解かず、ひたすら介抱致して居ります。ところが、此の疫病には鰻の黑燒が大妙藥だといふことを聞きまして、二人は大喜いたし

生憎
足らはぬ中
百方
夜の目も合さず帶紐解かず

たものゝ、それを手に入れる道がありません。二人は代るゞに介抱の隙を見計らつて、谷川に行つて鰻を捜しますけれども、どうしても見當りません。姉弟は大いに痛心して、力をおとして居りました。或夜お今が川にまるつて水を汲んで歸りますと、途中で、其の水桶の中で、がぶりと音がしました。何であらうかと怪しみながら、急ぎ歸つて見ますと、不思議や、大きな鰻が泳いで居りました。

痛心

さしもの難症拭つた様によくなりました。

神明の感應

姉弟の喜は一通りでなく、早速黒焼を作つて、父に用ひさせました。すると、さしもの難症が、拭つたやうによくなりました。

二人の孝行が段々に世に知れ渡り、鰻の事も神明の感應だと評判高くなりまして、終に藩侯の耳に入り、金や米を褒美として賜はりました。

(一)東山天皇の御代。俳句の大宗匠

時は元祿(一)の頃でありました。當時有名な俳句の大宗匠といへば、誰も知る松尾桃青芭蕉翁であります。此の芭蕉翁が或年の春三月、山城、攝津の間を遊歷して居りましたが、長い間儉約をして金一両を餘しました。

とある

人倫の道

律義一偏たつて

した。これは翁が永年心掛けて居た吉野の花見の旅費に充てる爲でした。翁は勇んで大和まで參りました。とある路傍の茶店に休息して、圖らず、右の孝子おきん、長兵衛の話を聞きました。翁は涙を流して感じ入り、其の村や道筋を尋ねまして、直樣それから孝子の家に參りました。姉弟に會ひまして其の孝行を賞し、なほ人倫の道を諭し、父を慰めて一両の金を出して、いさゝかながら父を養ふ料にといつて贈りました。律義一偏の姉弟、固く辭退致しましたけれども、たつて置いて立去りました。勿論翁は最早吉野へは行か

飄然

ず、其のまゝ飄然として歸つたのであります。

翁は途中で或知人に出逢ひました。知人は直ちに聲をかけて、「先生、吉野は如何でございましたか。」と尋ねました。翁は吉野へは徃かずに歸る所である事を、かい摘まんで話しました。知人は、「先生、吉野の花見は永年のお望でございましたのに、御殘念でせう。」と申しました。翁は頭を横にふつて、「イヤイヤ、決して殘念でない。今回は人の心の花を見て、吉野の花見にも優る樂みを致しました。」と、呵々と打笑つて、後をも見ずに去りました。

——斯民家庭——

人の心の花

呵々

二〇　夕立

坪内雄藏

風鈴の音もせず、庭の木の葉も動かず、大空の雲のみ、あわたゞしげに走る。やがて、風俄に吹きおろす。木木の蟬は鳴きやみ、蜘蛛はちゞこまりて、巢の眞中にぶらさがる。

雷の音、おし出すやうに、南より西へと鳴りわたる。いなびかり激しく閃き、雷の音ちかくなる。銀の矢のやうなる雨横ざまに飛來りて、雨戸をたつる間もなく、緣をうち、屋根をうつ。雨の音、雷の音、風の聲、暫くは

銀の矢のやうなる雨

其の外の聲は聞えず。

古き屋根のそこ〳〵より雨もり始む。盥よ桶よと呼ぶ聲、笑ふ聲かしましく、臺所の板の間に足音あわたゞし。

雨やゝ小ぶりとなる。緣先の手拭かけ、尙はたゝと窓をうち、しめたる障子の紙、風の出入毎に、はたりはたりと鳴る。

雨全く霽る。窓を開くれば風爽に心地よく、木々の青葉、瓦屋根、目に入る物皆いさぎよし。蜘蛛は巢を繕ひ、蟬の聲また聞えて、庭は拭ひたるやうなり。

いさぎよし

二一　祖先

祖先を崇敬するは我が國古來の美風なり。我が國は世界の文明國中にて、最も古き國の一にして、上に萬世一系の天皇あり。下に忠良なる臣民あり。かくて皇室を尊び、祖先を敬ふの美風を生ぜり。此の美風はわれ等が祖先より受けたる所なれば、われ等はまたこれを子孫に傳へざるべからず。われ等の祖先は、君には忠を盡し、父母には孝を致し、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友に信なりき。われ等がこれ等の諸德を重ん

——女子國文教科書——

家名

ずるは、即ち祖先を崇敬する所以なり。

祖先に對する務の中にて大切なるは、家名を汚さざることなり。われ等が正しき行をなし、君の爲、國の爲、力を盡し、行を愼み、業を勵みて、家名を全うするは、祖先に孝なる所以なり。もしこれに反し、人たる道に背きて、家名を傷つくることあらば、これ即ち祖先の名を汚すものにて、祖先に對して不孝となるなり。家名の重んずべきは、門地の如何によるべきにもあらず、又祖先の功業の有無に拘るべきにもあらず。

祖先より傳はりたる家産を保持し、進んでは之を

增殖するも、祖先に對する務なり。天災、地變、疾病の如き避くべからざる事情によるにあらずして、祖先より傳はりたる家産を破るが如きは、祖先に對して大なる不孝なり。また新に一家を興すものも、家産をつくりて其の家の基礎を固うし、以て祖先の名を全うすべし。家産は大切なるものなれば、家業に勉勵して、家産を增殖することをつとむべし。されど不正なる手段によりて家産をつくるが如きは、却つて祖先の名を傷つくるものなれば、かたく戒むべし。

——國定高等小學修身書——

二二　汽車の旅(一)

東京の上野停車場から青森行の下り列車に乘りました。仙臺までは水戸を通つて行く常磐線の方が面白からうとも思ひましたが、やはり東北本線の方を選びました。汽車の出發しようとする時、ちやうど一臺の飛行機が頭の上を通つて、東の方へかけつて行きました。埼玉縣廳の在る浦和、氷川神社の在る大宮を經、栗橋の鐵橋を渡つて、音に聞いた(一)阪東太郎を越えて、間も無く宇都宮に着きました。こゝは栃木縣

(一)利根川の異名。上野國利根郡文珠山に發し、下總國銚子に至りて海に注ぐ。

廳の在る所で、西の方に日光の山が見えます。日光へ行くのには、こゝで乘替へるのです。

宇都宮から北へ行くと、那須の平野へはいります。今は田や畠も開けましたが、昔は廣々とした野原であつたのでせう。

矢なみつくろふ籠手の上に

ものゝふの矢なみつくろふ籠手の上に
　霰たばしる那須のしの原

といふ源實朝の歌や、殺生石の話などを思ひ出しました。

(二)白河に着いては、

(二)磐城國西白河郡。

都をば霞とともに立ちしかど
　秋風ぞ吹く白河の關

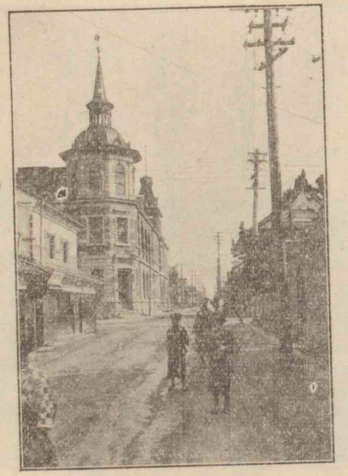
といふ歌から、昔の旅行の不便であつたことを思ひ、(三)能因法師の苦計もをかしく思ひました。こゝは今馬市で名高い所ださうです。

(三)後鳥羽天皇頃の歌人。苦計

分岐點

郡山は磐越線との交叉點、福島縣廳のある福島は奥羽線の分岐點です。宮城縣廳のある仙臺に着いたのは、上野を出てから十時間の後でした。日本三景の一といふ松島はこゝから近いのですが、急ぎの旅ですから寄りません、歸りには見物したいと思つて居ます。ふと竹やぶに雀の居るのから、舊城主伊達氏の事を思ひ出しました。

(四)竹に雀は伊達氏の家紋。



仙臺芭蕉辻

いよ〳〵北へ進んで一關へ來ました。もう巖手縣です。此の近所に平泉といふ所があります。昔藤(五)原氏が榮華を極めた所で、今中尊寺(六)といふ古い寺があると聞きました。源義經は此の近所で討死したのです。盛岡は縣廳の所在地です。

(五)藤原清衡、基衡、秀衡の三代。

(六)仁明天皇の嘉祥三年(一一五〇)創建と傳ふ。

青森縣にはいつて、牧場に名高い三本木や七戸（しちのへ）の附近を過ぎて淺蟲のあたりへ出ると、始めて海が見えて、間も無く青森に着きました。上野を出てから僅かに二十三時間で四百五十六哩、埼玉、栃木、福島、宮城、巖手、青森の六縣を通つたのです。

青森市

自修文

二三 はがき便 一

汽車中にて辨當をしたため午後二時日光に着直ちに東照宮へ參拜、若しい白雪を飛ばす大谷川其の上に架したる朱塗の神橋老杉の綠と相映じてさながらの繪に出度ひ東照宮より大猷廟へまはりて唯今帰宿致したるばかりに出度ひ明日は中禪寺まで參り度と存居ひかしこ

二

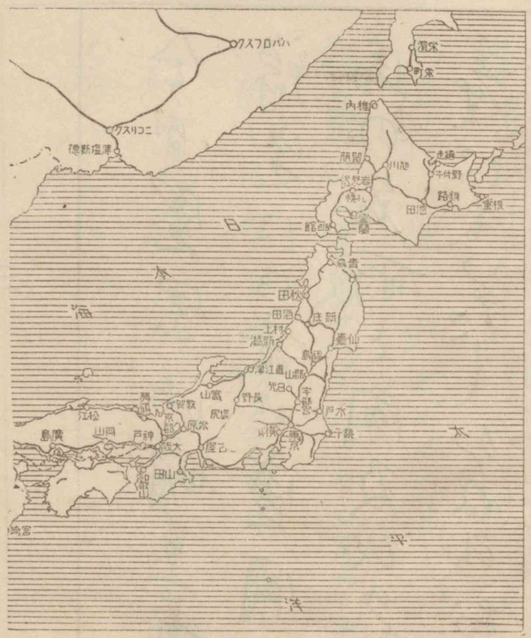
「松島やあゝ松島や松島や」と感歎するのみにて他に妙句を案じ得ざりきといふ松島の全景を今日富山の上より一覧いたしはかゝ霧立ちて島の見え隠れ改めは殘念にも覚えて又却つて面白くも覚えはかしこ

三

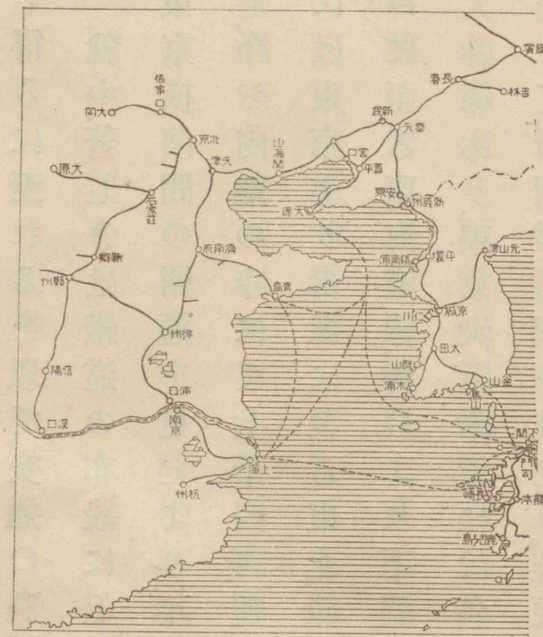
今日盛岡泊明日青森着の豫定にて庭は盛岡以北は産馬の名所と聞及びはが馬はお土産にもいたしかねはお土産は津軽塗にてもと存はかしこ

藩政

二四　我が國の交通



徳川藩政の頃には、大小二百六十餘藩全國各地に在りて、各其の境を嚴にし、天然の難所の外なほ人爲の關所をさへ設けたり。されば行旅の人、百里の道程を行かんには、十日の旅寐を重ねざるべからず、交通の具とても、駕籠又は駄馬の背あるのみなりき。然るに今や阪路を平夷にし、河川に架橋する等、道路の築造次第に成りて、全く昔日の觀を改め、凡そ國内の道路は



邊陬　軌條鐵道網

其の必要の程度に應じて國道、縣道、里道の三とし、常に修築改造を怠らず、邊陬の地に至るまで、車輛を通じ得るに至れるを以て、交通の利便いふばかりなし。

就中、著しきは鐵道の布設にして、明治五年始めて東京横濱間の開通を見しより、年々其の哩數を增加し、今や内地のみにて七千四百哩以上に達せり。本州には東京より青森に至る東北線、京都、大阪を經て神戸に至る東海道線、神戸より下關に至る山陽線の三大幹線あり、東京、大阪附近には各地へ通ずる軌條相交りて、所謂鐵道網を成せり。輕便鐵道、電車鐵道を布

經營　縱貫　通算

設せし地方も亦少からず。

北海道の函館線、九州の鹿兒島線、朝鮮の京釜線、京義線は皆内地線と連絡し、京義線は更に南滿洲鐵道に連る。南滿洲鐵道もまた日本人の經營する所とす。臺灣にも縱貫線路あり、輕便鐵道の私設に係るもの亦多く、此等を通算する時は、約一萬哩に達せり。

陸運の便かくのごとくなるに比して、水運の事業は更に急速の進歩を成せり。日本郵船、大阪商船、東洋汽船の三大汽船會社あり、内地沿岸、支那、印度等への航行は言ふに及ばず、歐羅巴、阿弗利加、南北亞米利加、

濠洲等、世界行く所として日本商船旗の翻らざる所なきに至れり。

昔は内地の旅行にも長日月を要して、途中の危難も尠からざりしかば、旅行は極めて億劫なるものなりしが、今は海外へ行くもいとたやすく、旅行を以て人生樂事の一つと數ふるに至れり。

億劫

二五　細川幽齋と太田道灌

(一)應仁の大亂以後、北は陸奥より、南は筑紫の端まで、世は刈薦の亂れ〳〵て、いつ治るべしとも見えず。文

(一)應仁元年（一四六七）より十一年間、細川勝元と山名宗全との京都に於ける戰。

文藝の花地に委す

藝の花は地に委して、大方顧るもののもなかりしが、身は武門に生れながら、優しくも其の花の種を拾ひて、おのが城郭に培ひける人あり。太田道灌、細川幽齋の如きこれなり。

培ふ

(二)細川幽齋は、足利の長臣たる細川の名門に生れ、十四歳の初陣より此のかた、兵馬干戈の間にのみ奔走したりしが、或日の戰に、敵將を追ひつめたるに、敵は早くも馬を乘てゝ逃れたり。幽齋もはや尋ねんに詮なし。引返さん。といふを、從卒暫しとて、件の馬をあらため、「敵未だ遠からず。早く追掛け給へ。」とて、主の轡を

(二)名は藤孝。慶長十五年（一六一〇）歿。年七十七。

長臣　名門　干戈

息をもつかず

執りて、息をもつかず驅出で、やがて、彼の敵を見つけて、打取らせたり。

幽齋從卒に向ひ、「何を以て敵の遠からざるを知り得しぞ。」と問ふ。從卒答へて、「古歌に『君はまだ遠くは行かじ我が袖の袂の涙乾きはてねば』と詠めり。さきに馬の鞍いまだ溫なりしかば、右の歌に思ひよそへて其の遠からざるを知りたり。」といふ。幽齋手を打ちて、「さて〳〵、今の世に無用とおもひし和歌の道にも、さやうの德はありけるよ。」とて、これより師に就きて、ひたすら和歌の道にいそしみぬ。

思ひよそふ

(三)太田道灌が斯の道に志しゝにも、亦之と相似たる話あり。道灌は初め左衛門大夫持資とて、關東の管領上杉が臣にて、幼時より大膽にして、人を人とも思はず、武道をのみ好みて、末怖ろしと稱せられしが、血氣の頃鷹狩に出で、雨にあひて民家に入り、蓑を借らんといふに、主の少女何とも答へずして、山吹の花一枝を差出せり。持資心得ず、其のまゝに歸りしが、後或人の、「それは、『七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき。』といふ古歌の心なるべし。」といふを聞きて、持資始めて風流の趣味あるを解し、それより

(三)名は持資。始めて江戸城を築く。文明十八年（一四八六）。年五十五。

末怖ろし血氣の頃

趣味

遠くなり近くなるみの濱千鳥
鳴く音に潮の滿干をそ知る（道灌）

（四）足利第八代將軍。延德二年（一四九〇）歿。年五十六。

敘感

和歌文學に志を寄せたり。

後京に上りて將軍義政に見えし時、後土御門天皇勅して武藏野の有樣を問はせ給ふ。道灌歌を以て對へ奉る。「露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野の原。」と。又隅田川の都鳥を問はせ給ふに、「年ふれど我がまだ知らぬ都鳥隅田川原に宿はあれども。」さらば汝の舘の風景はとありければ、「我が庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る。」と答へ申ししかば、敘感淺からず、御製を下し賜ふ。

武藏野は刈萱のみと思ひしに

かゝる詞の花もさくかな

めり

二六　天長節

長き暑中休暇は終りて、新學期は今日より始る。休暇の最終日たる八月三十一日は即ちめでたき天長節なり。十月三十一日を以て天長節祝賀日と定められたれば、八月には宮中の御宴もなく、學校にて奉祝の儀式もなけれど、國民は此のめでたき佳節を忘れず、包みあへぬ喜は人々の心に充つめり。

かけまくも畏けれども、天皇陛下には明治十二年

の御降誕にまし〳〵、明治二十二年の天長節を以て皇太子に立たせられ、明治四十五年七月、踐祚あらせられたり。先皇の天資を受けさせ給ひて、御幼時より明敏におはし、皇太子殿下として、年々各地方を巡啓ありて、民情を見そなはし給へり。(一)登極の初、群臣を召して下し給へる勅語の中に、

朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサランコトヲ期ス有司須ラク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ

踐祚
天資
(一)大正元年七月三十一日午前十時朝見式の勅語。
登極

朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シテ忠誠ヲ致スヘシ爾等克ク朕カ意ヲ體シ朕カ事ヲ奬順セヨ

と仰せられたる、畏しとも畏し。

我等は明治の聖世に生れ、大正の今の大御代に人と成らんとす。先帝の下し給へる教育勅語と戊申詔書とを身に體して、常に勤勉して、學を修め、業を習ひ此の大詔に宣はせたる如く、忠誠以て今上陛下に仕へ奉らざるべからず。此の心、何時として忘るゝ時なけれども、昨日の天長節に逢ひて、今更に其の感の深きを覺ゆ。

和衷協同
奬順
聖世
身に體す

二月の後、天長節祝賀日は來るべし。其の頃は秋も已に闌にして學期の半ばなれば、心神益〻爽にして、學業の進歩も一しほならん。明治の御世の天長節をさへしのびて、感慨いよ〳〵深かるべくこそ。

闌　さへ

とやせましかくやせまし　あゝしたらよからうか、かうしたらよからうか。

自修文

二七　しか女

小川直子

大和國磯城郡爲川村の住民永井佐平といふ者の娘、しか女と呼べるは、幼きとき疱瘡を病みて盲目となりぬ。此の女のかく不具の人となりて、人並なる女子の本分をも盡し得ざるを、父母はいと不便のことに思ひ、とやせましかくやせましと、心を惱ましけるが、しか女はましして憂き事と朝夕憂へ、自ら工夫して、手さぐりに裁縫を習ひ覺えけり。初の程は小さき風呂敷、あるは小袋などのたやすき物のみ縫ひ居たりけれど、やう〳〵手なるゝ儘に、衣服をも仕立つるまでに上達し、苦辛數年を積みければ、後にはなまじひなる尋常婦人が手工よりも優りて、うるはしく仕立つるやうに成りけりとぞ。明を失へる少女すら、熱心に勉むるときは、かくの如く成就するものなれば、身體具足せる人は、天よりわれに幸福を與へ給へる恩惠を時の間も忘るゝことなく、おのがじし其の業に出精すべきなり。

——高輪御殿進話錄——

なまじひなる云々　いゝかげんなみ〳〵の女の意。
明を失ふ　めくらになる。
具足　かけた所なくそろつてゐること。
おのがじしめい〳〵に。

二八　鳥の美

飯島魁

風致　山光水態　藝術

風致といふものは、單に山の形、水の姿、それに美しい色彩の美を與へて居る植物ばかりで組成せられて居るのでは無い。山光水態いかに美しく、草花樹葉いかに麗しくとも、其の間に動く何物かが無ければならぬ。それは即ち動物である。昔から花鳥といふ。文學、繪畫、彫刻、音樂等あらゆる藝術には、花と鳥とが重要な題材とせられて居る。殊に吾が邦の繪畫や詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占めて居て、其の中から花鳥を除き去つたら、非常に貧弱なものとなつてしまふ。

貧弱

わが宿の池の藤波咲きにけり
山ほとゝぎすいつか來鳴かん

(一)古今集にあり、讀人不知。

といふ通り、花だけ鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雜な美が成立する。梅に鶯、卯花に杜鵑、蘆の花に雁といふ風に、四季それ〴〵の花には鳥が附屬物となつて居る。梅に鶯、竹に雀ときまつてしまへば面白くはないが、花と鳥とで色調が整へられ、線條に變化が出來、こゝに始

單調　あしらふ　色調　線條（あやすやう）

動的靜的

めて動的、靜的兩面の美が成立するのである。

乾燥

獨り鳥のみならず、あらゆる動物は皆かく風致に美を加へて居る。禽獸蟲魚は昔からの畫題であり、詩材である。春日野から鹿を奪ひ、武藏野から蟲を除いたならば、其の春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ乾燥なものと成るであらう。其等美觀上の價値あるもの、

大袈裟

大袈裟にいへば、人生の存在に價値のあるものを、人間が自由に捕殺する權利を持つて居るだらうか。分り易くいへば、狩獵稅を出しさへすれば、それで勝手に鳥獸を殺してもよいものか、どうか。一年、二年では

影響

其等狩獵の結果は現れて來ないが、五年の後、十年の後は如何。百年とまではいはぬ、五十年の後にはどんな影響を此等の生物に及すであらうか、實に恐るべきものが有るであらうと思ふ。事によると、二十年、三十年の後には、吾々の見た古い木も、美しい鳥も姿を隱して、吾々の子孫はそれを眺める事が出來なくなりはすまいか。(二)鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とある鶯は、どんな鳥であらうといふやうな事に成るかも知れぬ。吾々は吾々の見た鳥や獸を、やはり子孫に遺して、子孫にも樂しませてやりたく思ふ。

(二)「鶯の笠に縫ふてふ梅の花、折りてかざさん老かくるやと。」(古今集、東三條左大臣)

誇大

觀察

「鳥類全滅の虞あり」かくいふと、人或は誇大の言をなす者といふてあらう。けれども誇大でも何でもない、日本の鳥類は今將に全滅せんとしつゝあるのである。去年と今年とを比べて、其の間の差異を發見することは困難である。併し今日を十年前、二十年前と比べて見ても、其の間に非常な差異のあることを感知するであらう。此の過去の變化を以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現象を呈するかは、今から豫め想像することが出來る。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狹い日本で觀察

歷史的に成る

(三)淺草寺、金龍山と號す。

しても、既に歷史的に成つたものがいくらも有る。

諸子は美しい桃花鳥色の色彩を知つて居るであらう。併し今は桃花鳥色こそあれ、其の色に此の名を負はせた朱鷺といふ鳥は居ない。桃花鳥色とは其の色が朱鷺の羽色に似て居るから附けられた名であるが、此の鳥は最早全滅して、姿を見ることが出來ない。蘆田鶴の千代呼ばふといはれた江戸の千代田城には勿論、江戸附近には多く鶴が居たものであるのに、維新後は其の影をだに見ることが出來なくなつた。鸛も昔は澤山居た。(三)淺草の觀音さんへ行く子供は、

皆鸛が見られるといつて喜んだものだ。(四)築地、淺草の両本願寺、本(五)所の五百羅漢の屋根の上にも、うよ〳〵する程澤山鸛が居たが、今は早全國一般に居なくなつた。鷺の減つたことも夥しいもので、昔は到る所の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見ることが出來たが、今では御獵場以外に多く見ることは出來ない。これはほんの二三の例である。其の他あらゆる鳥類は、日本から姿を隱さうとして居るのである。風致の上から觀て、ゆゝしき一大問題ではあるまいか。

(四)京橋區。
(五)天恩山羅漢寺。もと本所五目にありしが、今他に移る。

思案投首

二九　乃木大將

とよさかのぼる

忠義の神と仰がれし
楠氏再び世に出でて、
乃木大將をこゝに見る。
薩摩あらしのはげしきに
爭ひかねて、一度は
軍旗を敵に奪はれし
うらみは殘る植木口。
恥を知りたる大丈夫、

(一)陸軍大將乃木希典。大正元年九月十三日夫人と共に明治天皇に殉死す。年六十四。
(二)植木は熊本市の東北約三里。

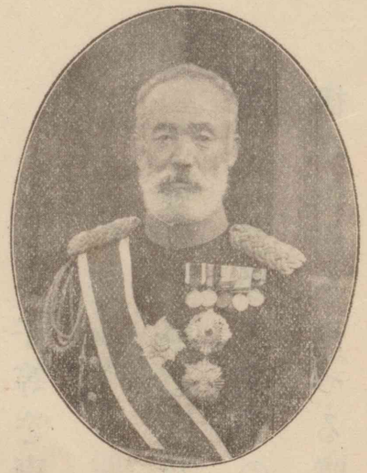
とよさかのぼる

(一)
(二)

うべなり

難攻不落

とくより身をば君國に
捧げて、家も顧ず。
うべなり心清きこと。
過ぎし日露の戰に
向ふは名におふ旅順城、
難攻不落と聞えしも、
何恐るべき、日本武士。
食を士卒と共にして、
苦難を分つ仁と勇。
慈愛の情は限りなし。



乃木大將

靜夫妻

人はさらなり、
馬にまで。
「愛子二人の
討死も
さらく惜しと
思はねど、
獨り殘りて
凱旋の
父老に合はする
顏ぞなき」。

これぞ將軍凱旋の
言づてなりと聞けるもの、
誰か袖をばしぼらざる。
誰か義心に感ぜざる。
「失せし二人の子に代へて、
華族の子等を育てよ。」の
大勅畏みて、
身もて率ゐし乃木大將。
あはれ其の人、大喪の
御車御所を出づる時、

身もて率ゐる

夫人もろとも露と消ぬ、
返らぬ行幸跡追ひて。
かばねは土に埋むとも、
其の功、其の名傳はりて、
世をむちうつの杖となり、
國を護りの神たらん。

三〇　柔よく剛に克つ

(一)仁惠社に給事する一婦人ありけり。劇しき戰に、一人の兵士の、重傷を被りて危篤の容態なるを看護し

(一)今の赤十字社病院の如きもの。

危篤の容態

殺伐の氣　けり。然るに兵士は病床にありても、猶殺伐の氣をさまらず。時々過激のことばを發して、其の婦人を罵詈し、却つて懇切なる看護を拒みけり。されど婦人は聊かも厭忌する事なく、益〻心を盡して懇に看護しけり。

罵詈

厭忌

悶え苦しむ　一日兵士は負傷の痛殊に甚だしく、悶え苦しみければ、婦人は醫に請ひて水藥を調へ、兵士の前に至りてこれを進むるに、兵士は「これを服して苦痛を久しうせんよりは、寧ろ死して苦痛を免るゝの勝れるに如かじ」とて、堅く拒みて肯ぜざりき。婦人はひときは辭を和げて、其の然らざる故を說諭しけるに、兵士は

ひときは

其の藥を取りて、これを婦人の面に潑ぎかけけり。されど婦人は少しも不平の色なく、更にかの藥を調へ、再び兵士の枕頭に至り、これを進むること初の如くなりければ、兵士は勃然として怒氣面に溢れ、忽ち藥碗をとりて、これを打碎きしかば、藥水散じて婦人の衣を汚せり。

勃然怒氣面に溢る

兵士は心中窃に「かくてこそ、かれが頑固を懲すに足るべけれ」と思ひしに、婦人は猶前の如く藥を調へ、懇に勸めて曰く、「とく此の藥を服し給へ。いざ召し給へ。必ずな否び給ひそ」といふに、兵士は始めて其の誠

な…給ひそ

神の使

意に感じ、怒氣忽ちに消えて、涙を流して言ひけるは、「あはれ汝は必ず神の使なるべし。さるを愚にも怒り辱めしは我が過なり。」と、かつ泣き、かつ謝して、遂に水藥をとりて快く服したりとぞ。「柔よく剛に克つ。」とは、かゝる婦人をやいふべからん。

——婦女鑑——

三一　看病

新保磐次

世に病人ほどあはれなるものはなし。春の花、秋の紅葉も心の儘に見ること能はず。山海の美味も心の儘に食ふこと能はず。讀み、書き、縫物も心の儘に勉むることと能はず。唯つれ〴〵と籠り居て、終日心を傷ましむるのみ。

此のあはれなる人を勞り慰むるは、人たるものの務なり。殊に女は心優しく、注意細かなるものなれば、看病の業は最も適當なる務なり。

病人の室は折々明放して空氣を通し、惡しき空氣の滯らぬやうにすべし。然れども風の向を考へて、直ちに病人に當らぬやうにすべし。

衣服も屢、取替へて風を通し、日に當て、汚れたるをば直ちに洗ふべし。こは常の人にも必要の事なれど、

むねとすべし

事ずくなに

病人には殊に意を用ひて、萬事清潔をむねとすべし。

病室には雜具をよく取片付け、時々の花、青葉、又は面白き繪などを程好く飾り、事ずくなに、綺麗にすべし。起居、振舞、障子の開閉（あけたて）を、荒々しく忙しくすべからず。何事も病人の心靜ならんやうに心付くべし。

病室にありては、憂顔をなし、或は小聲にてさゝやき合ひなどすべからず。かくすれば、病人は己の病の重き故かとて、心を傷ましむるものなり。また病人に妄りに話し掛けて返答せしむべからず。唯面白き話を聞かせ、又は靜に仕事をしつゝ、傍に侍るべし。

一に看病二に藥

かく親切に、細かに、靜に、面白く介抱する時は、病人の心安く、平かにして、全快も意外に速なるべし。世の諺にも、「一に看病、二に藥。」とて、看病の力は、遙に藥の力に勝るものとせり。

三二　病める友の許へ

秋雨さびしく降りつゞきて健なる身にも聲
陶しき堪へがたき此の頃御病状は如何にいや看
護婦の廊下を行通ふ足音のみ聞ゆる病院内の
夜の御寂しささこそと御察しも上いさて此の

春秋子様方より根分していたゞきは庭の萩可
なり見事に咲出ていせめては此病床の御評様に
御覧に入れたしと存じ一枝使に持たせ差上は
つれ〳〵の御眺ともなし給はらば花も本望と
存は次の日曜には秋子様清子様ともゞおとづれ
まゐらせて何か面白き御話も申上度と楽し
み居はかしこ

右返事

御手紙ありがたく拝見致は此の通り此返事
も書けはほどに相成は曽御安心下され度は

度〻御尋ね下され御親切身にしみてありが
たく友なればこそあなたなればこそと誠に
嬉しく存はあなた様よりの御贈物とて看護
婦の持来りは萩の一枝枕元の花瓶に生けは
へば五尺にも餘る長き枝は床の上までも届きて
寂しき病室も俄に賑しく相成は心地いたしは
朝夕の好きなぐのめと誠にありがたく存は一寸
一筆御使を待たせおきて御禮までに書きつけは
かしこ

三三　春夏秋冬

一

空も霞みて、　遠山の
櫻花さく　　永き日に、
囀る鳥の　　聲聞けば、
春の喜　　はてもなし。
柳の綠　　菜の花の
あや織る野べに　　旅寐して、
曇(一)りもはてず　　照りもせぬ
月を見るこそ　　嬉しけれ。

二

ほと、ぎす鳴く　　森蔭に、
卯の花白く　　咲出づる
夏の朝の　　眺こそ、
春にもまして　　風情あれ。
晝の暑さを　　行水に
流して、庭の　　ゆふ涼、
いさ、小川の　　水の面を
螢飛ぶこそ　　嬉しけれ。

(一)「照りもせずくもりもはてぬ春の夜の、おぼろ月夜にしくものぞなき。」（新古今集、大江千里）

風情

三

いつか夏去り、　秋(二)來ぬと
目にはさやかに　見えねども、
風の音にも　靜けさの
こもりて、秋は　物寂し。
萩(三)のうねりに　散る露を、
命とたのみ　鳴く蟲の
聲もふけ行く　夜半の窓、
書を讀むこそ　嬉しけれ。

四

(二)「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。」（古今集、藤原敏行）
さやかに

(三)「白露をこぼさぬ萩のうねりかな。」（芭蕉）

三、「白雲に羽うちかわしとぶかりの、かずさへ見ゆる秋の夜の月

あす

そだ

四、寒月や我一人ゆく橋の音

林まばらに　葉は落ちて、
寒げに見ゆる　鳥の宿、
裏の大川　水あせて、
橋の脚いと　高きかな。
雪降積る　家の外、
ゐろりにそだを　折りくべて、
親はらからの　永き夜を
語り合ふこそ　嬉しけれ。

自修文

三四　一年の折々

「元日や晴れて雀の物語」老いたるも、若きも、麗にさし上る初日影を仰ぎ見て、大御代の新年を賀ぎ合ふ。三箇日の朝な〳〵雑煮の餅を祝ふも、古き風俗とて嬉しく、七日の粥にも若菜つみけん昔おもほゆ。松の内もいつしか過ぎて、八日よりは學校の授業も始る。今は年の中の最も寒き時にて、五日の頃より二三日の頃までを寒といふ。

寒明けて立春となる。立春とは東風氷を解く時なりといへど、東北地方の餘寒の嚴しさは寒の中にも劣らず。立春の前夜は節分にて、家々に「福は内、鬼は外」と豆撒の聲の聞ゆる處今もあるべし。十一日の紀元節も過ぎて、梅の花

元日や云云　嵐雪の句。
風俗　ならはし。しきたり。
昔おもほゆ　昔をおもひ出される。
松の内　元日から七日まで松かざりのある間。

も咲きそむれば、「梅一輪一輪ほどの暖さ」の句も想ひ出さるれど、「くま〳〵」に殘る寒さや梅の花」の感はた無くはあらず。

雛遊は三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば、桃の節供ともいひしが、今の暦にては花の蕾尚いと固し。三月十日は奉天占領の陸軍記念日にて、永く勇武なる軍隊の偉勳をしのばしむ。春分は二十一二日の頃にて、晝夜の長さ相同じ。俗に彼岸の中日といふ。即ち春季皇靈祭の日なり。中日の前後各三日を併せて七日の間を彼岸といふ。これは秋も同じく、秋の彼岸の中日は秋季皇靈祭の日に當る。春の彼岸は籾種をひたす時、秋の彼岸は麥を蒔始むる節なり。諺に「暑さ寒さも彼岸まで」といへり。

(一)嵐雪の句。
(二)蕪村の句。くまぐまはすみずみのこと。はた無くは　無いことも無い。
(三)明治三十八年三月十日。偉勳　おほきなてがら。しのばしむ　おもひださせる。
ひたす　水につける。

早くも咲出づる彼岸櫻をさきがけにて、四月は野も山も花の雲なり。五月の一日又は二日を八十八夜といふは、立春より數へて八十八日目の意なり。苗代の苗漸く伸びて、青き疊を敷けるが如し。古人の句に、

苗代の色紙に遊ぶ蛙かな

五日は男の子の節供とて、鯉幟の空高く飜るも勇ましく、二十七日は日本海海戰の海軍記念日なれば、學校にて海戰の講話を聞くも思出多かるべし。

六月十日の頃より梅雨の節に入り、連日の鬱陶しさ堪難けれど、農家には大切なる雨なり。六月二十五日は皇后陛下の御誕辰にて、此の日を天長節に對へて地久節と申し奉るも、臣民の至情にこそ。七月七日の夕は星祭の笹竹

(四)燕村の句。
(五)明治三十八年五月二十七日。
至情 まごころ。

精靈祭 死者の苦みを除くためのまつり。

にぎはしく、盆の三日の夜の精靈祭には燈籠の火影物哀なり。

八月の中頃は暦にては立秋の節に當れども、處によりては殘暑の暑さの暑中にまさること、餘寒の寒さの寒中より嚴しきが如し。八月三十一日は天長節なり。立春より數へて二百十日、二百二十日の頃は暴風雨多ければ、農家はしづ心なし。いつしか新穀も實のりて、神宮の神嘗祭は十月の十七日ぞかし。十一月二十三日の新嘗祭も過ぎて後は、霜置き霰たばしりて、日も次第に短し。十二月の末殘る日數ふるばかりになれば、處々に年の市など立ちて、人人は復新年を迎ふるに忙し。

しづ心なし 安心しておちついて居られない。(六)伊勢神宮。

親の用に云云 太祇の句。

親の用にたつ子幾人年の暮　——國定高等小學讀本——

掟て　國武揚る　世界の耳目を驚かす　豈……べけんや　組織

三五　愛國婦人會

明治維新の後、全國皆兵の令を布かせ給ひ、丁年に達せる男子をして、悉く所定の兵役に服せしむる事に掟て給へるは、我が國上古の舊制を復し給へるに外ならず。國武茲に於てか揚り、明治二十七八年及び三十七八年両度の大戰役に於ては、空前の大捷を得て、世界の耳目を驚かすに至れり。

帝國の女子豈徒らにして止むべけんや。愛國婦人會の組織は明治三十四年を以て成れり。此の會の事

癈兵　恤兵　弔慰　慰藉　適應

業は戰死者並びに准戰死者の遺族、及び癈兵の救護を目的とするものにして、戰時に於ては軍隊の慰問、送迎及び恤兵品の寄贈、軍人家族及び傷病兵の慰問、戰病死者の弔慰、並びに遺族の慰問、軍人家族及び遺族への授産、幼兒の保育、遺族及び癈兵の慰藉等、軍國の婦人として適應なる事業に盡

閑院宮妃殿下

內顧の憂

發動

力し、遠征の將卒をして內顧の憂なからしめんことを期す。要するに、劍銃を把りて戰場に出でざる代り、內に居て國民皆兵の義務を分たんとする愛國心の發動は、即ち此の會を成立せしめたる所以にして、能く我が國婦人の日本魂を發揮せるものといふべし。

此の會を主唱創設せしは、肥前唐津の人奧村五百子なり。五百子は明治三十三年清國事變に際し、本願寺慰問使の一行に加りて支那に赴き、具に將卒勞苦の情態を視察し、其の慰藉及び戰死者遺族救護の切要なるを感じ、歸朝の後親しく東伏見宮、閑院宮及び

所見

朝野

(一)岩倉具定夫人久子。

趣意書

(二)麹町區內山下町。

(三)載仁親王妃智惠子殿下。

同妃殿下に拜謁して所見を陳じ、尙朝野の人々に說きて其の贊同を得、三十四年三月岩倉(一)公爵夫人を會長として趣意書を發表し、同七月各地方長官を華族會館(二)に招きて、各府縣に支部を設くるの議を定め、尋いで雜誌を發行し、基金の制を定めたり。三十六年三月閑院(三)宮妃殿下總裁とならせ給

奧村五百子銅像

ひ、會務益〻揚れり。今や會員の數九十二萬を越え、基金百六十九萬圓に及ぶ。主唱創設の功は五百子に在りといへども、我が國婦人の愛國の至誠に賴るに非ずんば、如何でか此の盛況を見るを得んや。

明治三十七八年戰役に際しては、此の會の活動最も著しく、精神的に將卒を鼓舞し、物質的に遺族に惠與せし等、其の功甚だ大なりき。宜なるかな、論功行賞の時、各支部にも金銀盃を賜ひて之を表彰せられしことや。主唱者奥村五百子は明治四十年病歿せしが、勳六等に叙して其の功をしるし給ひぬ。東京九段阪下愛國婦人會本部の構内には、五百子の銅像あり。

宜なるかな……ことや

三六　明治天皇の御遺物を拜す　其の一

笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰出されましたので、定時に參內致しました處が、十一時すぎ權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私共は此の度先帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで、

第二學期

(一)大正二年一月。

權殿

靈感

私共は長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。其の瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打れない者は無かつたでございませう。其の權殿には、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を充てられたのでございました。

萬機の政親裁

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には

德教を布く

永く茲に在らせられて、德教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は

膺懲の師宏謨雄圖

膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が却つて遙に御立派である。しかもあまり廣くない二間續の御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御

瀟洒

椅子も實に御質素なもので、絨毯の如きは當初敷かれた儘のもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取替を屢願ひ出ましたが、御許がな

くて、遂に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央南向に御据ゑになつてあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭もなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。之についても、

年々に思ひやれども山水を
　汲みて遊ばん夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。

恐懼に堪へず

のみならず、此の御部屋にはストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以來御用ひがない。窃に承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍從は何故か分りませんが、唯仰の儘に火を消しました。さて其の後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許し遊ばされなかつたとの事でございます。是は勿論大御心を伺ひ奉るわけには參りませんが、侍從方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大

敵と戰ひ、飢寒に苦しんで居るのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第であらうと申す事でございます。それ以來は、唯一箇の小さい丸火鉢を御使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀するにつけても思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられたる御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな
　すきま多かる賤が伏屋を

斯民
賤が伏屋

てございます。

三七　明治天皇の御遺物を拜す　其の二

笠井信一

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所に於て御使用になつた御遺物全部、其の儘に据ゑおかれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に御備附になつてございました。床の間には其の當時の御

仔細に

軸物が掛けてあり、其の前方には御劒數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬ事でございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は、羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に燒痕がございます。これは先帝が御煙草を召上つていらつしやつた節、臣下より政務を言上致しましたところ、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた

修理

折、煙草が墜ちて此の燒痕がついたのだと申す事でございます。さて此の燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換へ申し上げんが爲、侍臣より幾度か願ひ出ましたけれども、斷じて御許が無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物と變らないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひ

ふるしに成り、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品もございました。鋏も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は侍從の方が何かの調に用ひた儘、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧て慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてあります。これは青山御所において遊ばされた頃から、御使用になつた物で、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで臣下より御取換を願ひ出ましたが、「なに、宜しい。」とて、御許が無い。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得ました。併し適當の皮が無い事を言上致しました處、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申す事で、侍從が、「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

其の傍にホワイト・シャツを入れる白いボール箱やうの物が澤山積重ねてございましたから、「何に遊ばす物か。」と侍從に尋ねました處、やはりシャツの空

箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留置かせられたのであるとの事でございました。

上奏裁可主務者

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して奉るのだそうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばさず、

隨時詠草

隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、

御歌所用ひるに其の途を以てす

御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞し召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

冗費

一天萬乘の君

一天萬乘の大君におはしましながら、禿びたる御筆を御用ひになり、敗れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか、皆

これ、節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

さて御次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵のため御持歸り、又は御買上げあそばされた物で、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に造花の如きも、格別の物でなく、何年前の物か色も褪めはてゝ、殆ど裝飾の用を爲さぬ物まで其の儘になつてございます。其の他、美術工藝品の御買上も皆御奬勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに
　ます樂みはあらじとぞ思ふ

とございますが、實に此のやうな御樂みを求めさせられる爲、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧れば我等は長い間、聖天子御一人に非常の御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こ

服膺

貢獻

こに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に
國民の力のかぎり盡すこそ
わが日の本のかためなりけれ
の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらん限りを盡し、以て「我が日の本のかため」の爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らん事を誓ふ次第でございます。——巖手學事彙報——

女子國文卷一 終

通用字及び正字對照表

（玆に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	剪	翦	塲	場	戟	戟	楕	橢
仞	仞	劔	劍劍	塚	冢	戲	戲	欵	款
侫	佞	効	效	墻	牆	拘	拘	殲	殲
免	免	勺	勺	寃	冤	拿	拏	殺	殺
兎	兎	卑	卑	寇	寇	抜	拔	毒	毒
円	圓	即	卽	寶	寶	挿	插	氷	冰
冐	冒	厨	廚	尅	剋	捏	捏	涅	涅
決	決	厩厩	廏	帽	帽	撲撲	攜	濶	闊
況	況	双	雙	并	幷	整	整	潛潛	潛
准準	準	収	收	廩	廩	旣	旣	焔	焔
凉	涼	叙	敍敘	廻	廻迴	昂	昂	熔	鎔
減	減	唇	脣	往	往	晋	晉	猿	猨
凡凡	凡	器	器	恒	恆	央	央	猪	豬
函	函	噴	噴	憩	憩	朽	朽	猫	貓
刄	刃	皿	回回	懺	懺	桿	杆	献	獻

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
獵	獵	獵	獵	玄	玄	瑣	瑣	畫	畫画
留	留	畱	畱	畧	略	痴	癡	皷	鼓
盃	杯	盖	蓋蓋	盜	盜	砲	礮	碍	礙
禀	稟	穎	穎	頤	頤	纏	纏	臥	臥
穎	穎	穎	穎	秘	祕	罰	罰	致	致
窃	竊	竊	竊	竪	竪	羣	羣	皐	皐
竪	竪	竪	竪	篡	簒	羹	羹	舖	鋪
篡	簒	簒	簒	粘	黏	耻	恥	舘	館
籤	籤	籤	籤	穀	穀	聟	壻婿	艶	艷
粘	黏	黏	黏	紀	紀	脈	脈	莽	莽
穀	穀	穀	穀	纖	纖	膓	腸	萠	萌
紀	紀	紀	紀	纖	纖	膝	膝	蛩	蛩
纖	纖	纖	纖	万	萬	冊	冊	叶	協
纏	纏	罰	罰	並	並竝	冨	富	囓	齧
臥	臥	致	致	亡	亡亾	冲	沖	坂	阪
裡	裏	褒	褒	京	京	勅	敕	野	埜
褒	褒	覇	覇	俟	竢	厠	廁	妊	姙
覇	覇	覽	覽	傚	傚	厮	廝	妍	妍
覽	覽	解	解	解	解	記	記	讖	讖
軟	軟	輙	輙	隣	鄰	釜	釜	讎	讐
軟	軟	軏	軏	釜	釜	針	鍼	鐵	鐵鐵
賓	賓	賛	賛	鎖	鎖	鐵	鐵	鎖	鎖
間	間	陷	陷	隔	隔	隙	隙	隙	隙
隔	隔	隙	隙	隙	隙	隷	隷隷	駄	駄
麵	麵	麵	麵	鬪	鬪	鬱	鬱	鶴	鶴
鶴	鶴	鶴	鶴	忘	忘	慍	慍	慙	慚
弊	弊	弊	弊	考	攷	普	普	村	邨
強	強彊	強彊	強彊	微	微	徹	徹	徹	徹

同字表（いづれにてもよし）

姉	姉	嶋	島	忘	忘	慍	慍	慙	慚
娉	聘	庵	菴	慍	慍	慙	慚	考	攷
婚	婚	弊	獎	慙	慚	考	攷	普	普
岳	嶽	弊	獎	考	攷	普	普	村	邨
峩	峨	強	強彊	微	微	村	邨	村	邨
峯	峰	微	微	村	邨	村	邨	村	邨

柿 柹　毘 毗　砧 碪　網 綱　荒 荒　蹈 蹈
案 桉　汙 汚　稿 藁　總 總　蔭 蔭　遁 遯
棊 碁　棋 温　溫 瘟　競 競　綵 綵　裸 裸　亂 亂　蝨 蝨　鉾 矛
棕 椶　烟 煙　煙 菸　筍 笋　組 組　紕 紕　袵 衽　銹 錆　鍾 鐘
椵 椴　機 無　无 旡　笄 笄　羈 羈　覊 覊　訛 譌　陰 陰　陰 陰
槁 藁　豬 豬　豬 豬　猪 猪　豬 豬　豬 豬　陰 陰　陰 陰
概 槩　猩 猩　猩 猩　私 私　斜 斜　艙 艙　船 船　誹 誹　誹 誹
朝 朝　紕 紕　紕 紕　糾 糾　槍 槍　谿 谿　溪 溪　雞 鷄　鷄 鷄
朴 樸　紅 紅　紅 紅　紘 紘　花 華　華 華　蹤 蹤　蹤 蹤　鷄 鷄

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中＊標ノ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

＊亙（コウ）　ワタル。「連亙」
亘（クワン）　亙ニ同ジ。

＊体（ホン）　笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。
體（タイ）　カラダ。

＊但（タン）　タヾシ、タヾ。「但馬」
但（シヨ）　ツタナシ、拙劣。

僭（セン）　身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
僭（デン）　ミダリガハシ、猥。

胄（チウ）　カブト、兜。「甲冑」
胄（ヲク）　ヨツギ、嫡子。又子孫。「胄裔」

協（ケフ）　カナフ、叶。
協（ケフ）　オビヤカス、脅。

＊刺（シセキ）　サス。「刺殺。刺客。名刺」
刺（ラフ）　モトル、ソムク、乖戻。「亞刺比亞」

臺（ダイ）　星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
台（ダイ）　ウテナ、ダイ。

＊後（コウ、ゴ）　ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
＊后（コウ、ゴ）　キミ。「皇后」

商（シヤウ）　アキナヒ。
商（テキ）　モト、本。

＊壺（コン）　ツボ。
壺（コ）　ミチ、宮中ノミチ。

＊姬（キ）　ツ、シム。
姬（シン）　ヒメ。

＊托（タク）　拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
託（タク）　ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

＊擔（タン）　ハラフ。又アグ。
扣（タン、ヘナツ）　ニナフ、カツグ。

改（イ）　鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
改（カイ）　アラタム。

＊槍（サウ）　ヤリ。
鎗（サウ）　鏘ニ同ジ。鏡ノ聲ノ形容。

＊欠（ケツ）　アクビ。「欠伸」
缺（ケツ）　カク。「缺席」

＊糸（シ）　ホソイト、細絲。
絲（シ）　イト。

＊羨（セン）　支那ノ地名。
羨（イ）　ウラヤム。

＊虫（チユウ）　魚介類の總稱。又マムシ。
蟲（チユウ）　シム。

＊詫（タイ）　ワビ、アブ。「詫狀」
詫（タ）　訛ニ同ジ。アザムク。

＊詔（デン）　ヘツラフ。
諂（タン）　ウタガフ、疑。

＊証（セイ）　アカシ、シルシ。「證明」
證（シヨウ）　イサム、諫。

＊豐（ホウ）　禮ノ古字。
豐（レイ）　ユタカ。

＊迄（キツ）　マデ。
迄（セフ）　ユク、行。

＊選（セン）　エラブ。（ヨリトル）
選（セン）　エラブ。（書物ヲ編纂ス）

〔郤（ゲキ）〕ヒマ、隙。
〔*卻（キヤク）〕ヒリゾク。「退卻」
〔鍛（タン）〕キメノ「鍛錬」
〔鍛（カ）〕シコロ、

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目

とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正六年十月廿七日印刷
大正六年十月三十日發行
大正七年一月十六日訂正再版印刷
大正七年一月十九日訂正再版發行

（女子國文）大正十年度臨時定價金八拾六

定價	全八冊
	各金三拾四錢
大正八年度臨時定價	金四拾八錢

著者　芳賀矢一

大正三年度臨時定價金七拾四錢
大正九年度臨時定價金五拾八錢

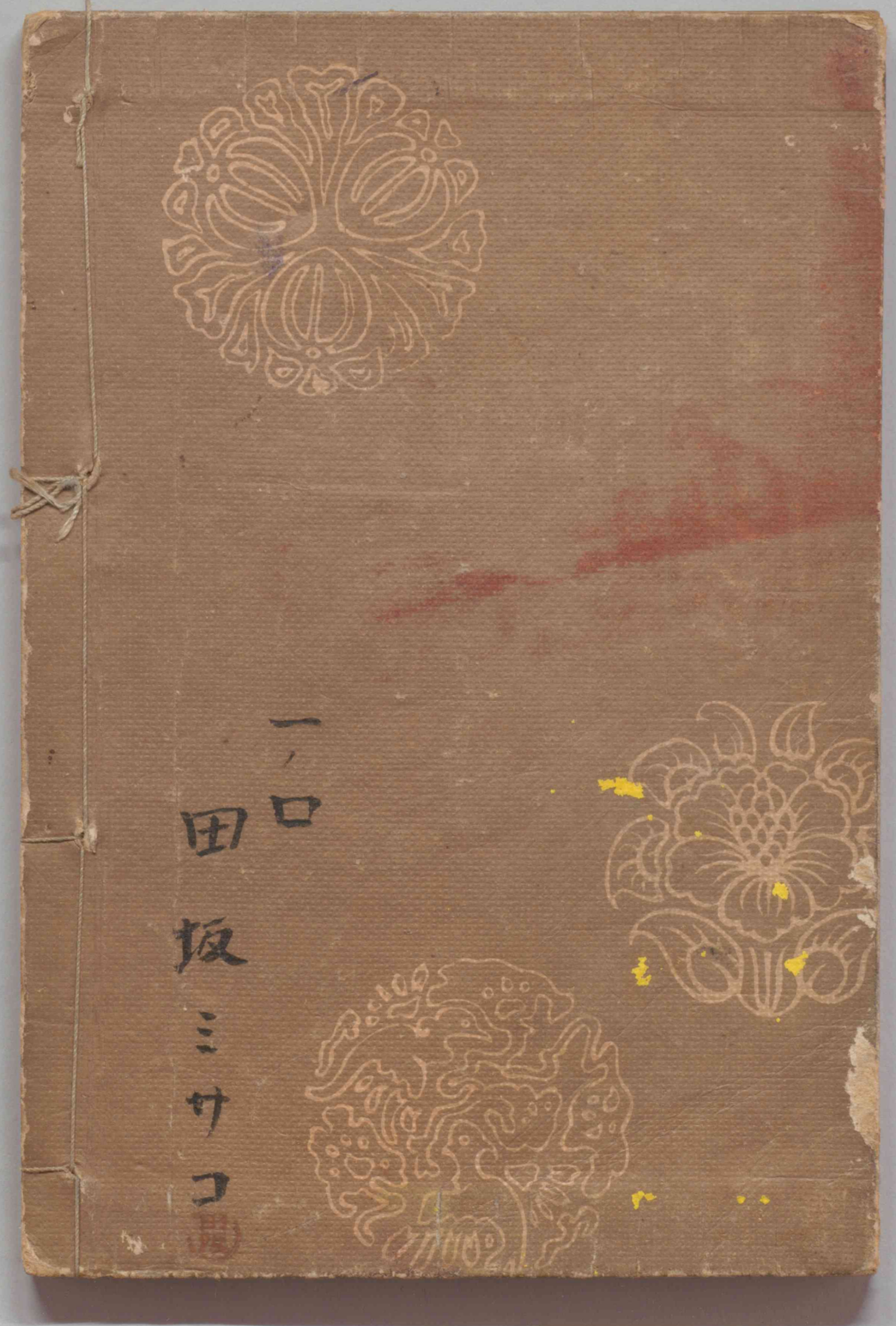
發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房

代表者　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社　秀英舍第一工場

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
電話神田三〇一四、三七六〇、三六六三番
振替貯金東京五〇一番

著作權所有


一ノ口
田坂ミサコ